

4 井戸

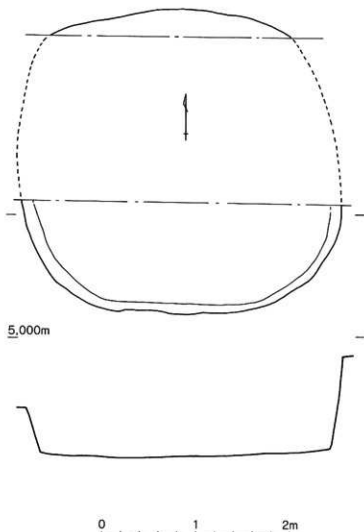
(1) SE113

位置と検出面 SE113 (第202図) は調査区中央やや北寄りのE61区に位置する。第Ⅱ面で検出されたもので、SE186に切られる。また、同位置の第Ⅲ面ではSK570が確認されているが、層的に本遺構がSK570より後出する。

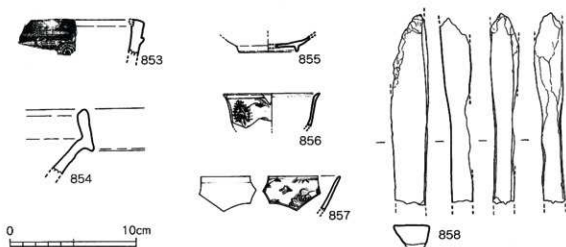
規模 本遺構の中央には幅1.6mの水路が横切っているが、平面形は復元できる。平面形は円形を呈し、その径は3.1~3.2mを測る。本来、中央部付近に井筒が存在するはずであるが、水路による破壊から免れた部分では確認されなかった。水路が横切った箇所に井筒が存在したものと推定される。

出土遺物 出土遺物 (第203図) のうち、853は瓦質土器火鉢である。円筒状を呈するもので、外面口縁下に低い突帯とスタンプ文を配する。854は備前焼播鉢である。乗岡編年の中世5期に相当する。855は中国産白磁皿の底部である。口縁部が端反になるタイプと思われ、16世紀前半に位置づけられる。850は中国漳州窯系青花小坏である。復元口径7.6cmを測るもので、口縁部は端反である。外面には牡丹唐草文がみられる。857は中国景德鎮窯系青花碗である。小野分類の碗E群に相当するもので、外面には界線のみが、内面には牡丹唐草文がみられる。858は砥石である。

井戸の時期 以上から、本遺構の時期は16世紀後葉に位置づけられる。



第202図 大友75次SE113



第203図 大友75次SE113出土遺物

(2) SE149

位置と検出面 SE149 (第204図)は調査区中央南寄りのE62区に位置する。第II面で検出されたもので、SK191、SK216に切られる。

掘り方 掘り方は径2.9~3.3mの円形である。井筒は掘り方のほぼ中央に設けられる。井筒本体は木製であったと思われるが、すでに大部分が腐朽して確認できない。井筒跡が円形を呈することから、木製の桶を使用していたものと考えられる。最下段の桶は、掘り方検出面から3.0m下がったところで、径0.8~0.9m、深さ0.5mの円形の掘り方を設け設置している。最下段の桶は痕跡が確認でき、径0.7mであったことが分かる。二段目より上部については、最下段と同様な桶であれば、5段ないしは6段を積み井筒としたものと推定される。井筒の周囲は、0.25~0.8mの層厚で順次掘り方を埋めていることが観察される。

井戸廃絶時 井戸廃絶時には、6層が井筒内に充填されたものと思われる。上部には、井戸を破壊し井戸封じを行なった際のものと推察される1~5層が見られる。

出土遺物 出土遺物(第205図)には、京都系土師器、備前焼、中国産青花などがある。

京都系土師器 859は京都系土師器で、2期に相当する。

860は東播系須恵器こね鉢と思われる。14世紀以前のものである。

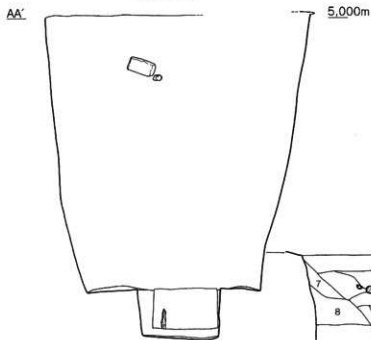
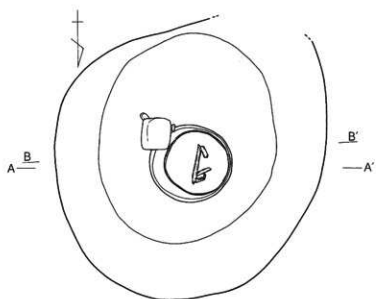
備前焼 861~864は備前焼挿鉢である。いずれも口縁端部が内傾するもので、外面に凹線が施される。これらは、乗岡編年の6期に相当する。

青磁・白磁 865~868は中国産の青磁、白磁である。865、866は鎊蓮弁文が施される青磁碗である。13世紀代に比定される。867は青磁碗で、外面に剣先蓮弁文の上部が省略されたものが施される。15世紀後半~16世紀のもの。868は白磁小坏である。16世紀代のものか。

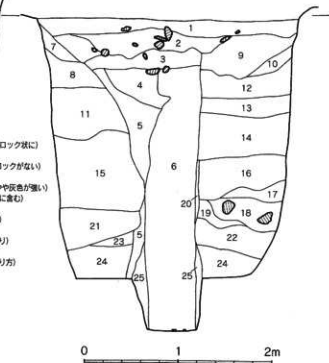
青花 869~877は中国産青花である。869は景德鎮窯系青花碗で小野分類の碗C群に相当する。870~874は漳州窯系青花碗である。875は萼筒底を呈する皿である。小野分類の皿C群に相当する。876は口縁部端反の景德鎮窯系青花皿である。小野分類の皿B群である。877は景德鎮窯系青花皿である。口縁部を欠くものであるが、文様等から直口口縁を呈するものと推定される。小野分類の皿E群に相当する。

鉄製品 878~880は鉄製の釘である。878、879は頭部を折り曲げ、断面方形を呈するものである。878は先端部がわずかに欠損する。879は完形品で、先端部が曲がる。880は頭部と先端部を欠く。

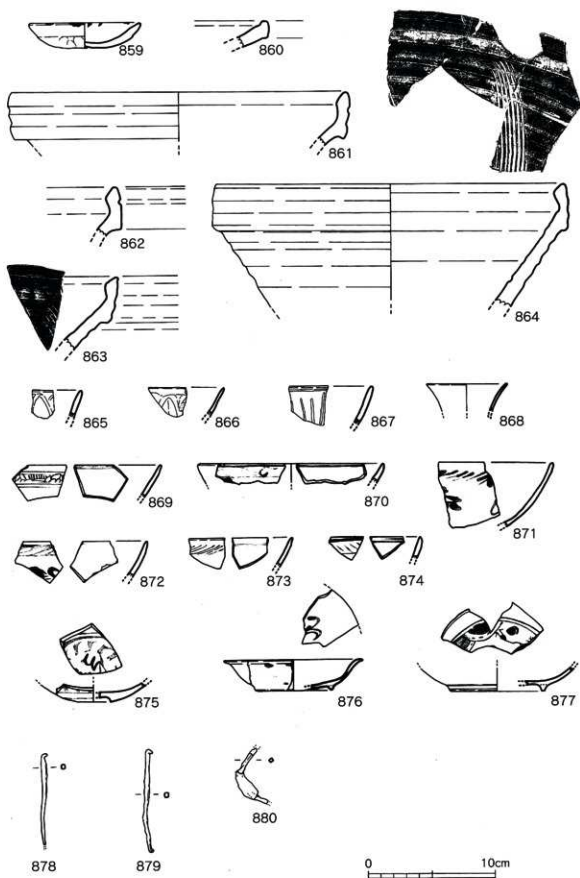
井戸の時期 以上の遺物から、本遺構は16世紀後葉に位置づけられる。



- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| 1 反黄褐色土層(粘土、灰化物少量混入) | 14 反黄褐色土層(砂質土がブロック状に) |
| 2 におい黄褐色土層(黄土中層、灰化物少量) | 15 におい黄褐色土層 |
| 3 褐灰色土層(粘土を少量) | 16 反黄褐色土層(14層のブロックがない) |
| 4 黄褐色土層(砂質土が全体に混入) | 17 反黄褐色土層 |
| 5 黄褐色土層(4層の砂質土を含まない) | 18 反黄褐色土層(17層よりやや灰色が強い) |
| 6 黄褐色土層 | 19 反黄褐色土層(鉄分を多量に含む) |
| 7 褐反黄色土層(灰化物混入) | 20 褐灰色土層(井筒) |
| 8 褐反黄色土層(7層よりも若干暗るい) | 21 暗褐色土層(しまりが強い) |
| 9 褐灰色土層(9層の鉄分含まない) | 22 黄褐色土層 |
| 10 褐灰色土層(砂質土がブロック状に) | 23 暗褐色土層(やや粘土性あり) |
| 11 におい黄褐色土層(砂質土がブロック状に) | 24 黄褐色土層 |
| 12 反黄褐色土層(一部砂質土ブロックあり) | 25 におい黄褐色土層(井筒廻り方) |
| 13 反黄褐色土層(12層より若干暗い) | |



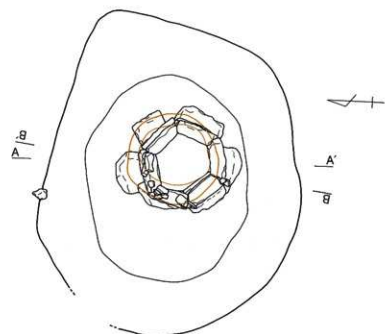
第204図 大友75次SE149



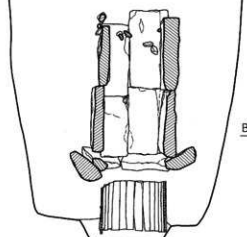
第205图 大友75次SE149出土遺物

(3) SE170

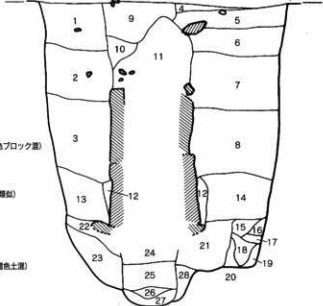
位置と検出面	SE170 (第206図)は調査区中央やや東寄りのD62・E62区にまたがり位置する。第Ⅱ面で検出されたもので、周辺には比較的大型の土坑(SK171、SK191、SK266)や井戸(SK149、SK216)などがみられる。本遺構はこのうちSK266と重複しており、SK266を切る。 また、本井戸に近接するように井戸がみられる。SE149、SE216などで、本井戸と併せ東西方向に並ぶように位置する。さらに、南西側約5mにSE182が、北西側約7mの第Ⅲ面にSE445がみられる。
掘り方	掘り方は、東西方向に長い不定形を呈する。その規模は、東西の最大長3.4m、南北2.0～2.7mを測る。この掘り方をほぼ垂直に3.2m下げたところで一旦平坦にする。この面は東西方向に長い楕円形で、東西2.2m、南北1.7mである。井筒を据える径0.95mの円形の土坑は、中央からやや東に寄った位置に掘られる。深さは0.2～0.25mである。
井筒	井筒の最下段には、円形の木製桶が据えられている。桶は径0.7m、高さ0.55mである。ここで、桶の上面までの掘り方を埋めた後、0.5×0.3m程の凝灰岩製板石を6枚花弁状に斜めに据える。これらの石の上に2段目の井筒を六角形に組む。石材は凝灰岩製で、縦0.7m、横0.4mほどである。六角形の石組みの内径は、0.6mを測る。調査では、石組みが2段分、最下段の桶から数えれば3段目までの井筒が残存することを確認することができた。本来は、少なくともあと1段ないしは2段の石組があったものと思われる。石組みの背後には、0.4～0.7mの層厚で掘り方を順次充填している。
井戸廃絶後	井戸廃絶後は11層が井筒内に堆積する。最上段の石組は、井戸封じなどに伴い抜かれたものと推定され、それに伴うのが9層、10層などと思われる。上部の石組み抜き取りは、最小限の範囲で行なわれている。
京都系土師器	出土遺物(第207、208図)には、京都系土師器、瓦質土器、焼締陶器、中国産磁器等がある。 881～884は京都系土師器である。このうち、881～883は皿である。口径10.3～11.3cmを測るもので、京都系土師器2期のものである。884は坏で、皿に比べ深い作りである。口径10.7～11.1cm、器高3.6cmである。京都系土師器3期のもの。 885は器種不明である。脚状のものが付され、外面には縦方向のハケメ、内面には横方向のハケメが施される。
瓦質土器火鉢	887、888は瓦質土器火鉢である。887は円筒形の器形を呈する火鉢の口縁部である。外面口縁下に2条の低い突帯が付され、その間にスタンプ文が施される。スタンプ文は連続せず、2個単位あるいは3個単位でみられる。888は底部で、板状の脚部が付される。体部下部には2条の低い突帯が付され、その間に双頭鳳手流雲文のスタンプが施される。スタンプは連続せず、一定の間隔をおき施文される。両者とも16世紀代に位置づけられる。
東播系須恵器	889は東播系須恵器こね鉢で、復元口径24.0cmを測るものである。口縁端部が上方に拡張される。14世紀以前のものである。
焼締陶器	886、890、891は焼締陶器である。886は復元口径17.4cm、復元底径6.0cm、器高6.2cmの小型品である。口縁部は、斜方向にのびる体部から内方のくの字状に折れる。端部は内傾する。外面は、口縁部無文で、体部は斜方向のヘラケズリが施される。内面の罫目は、体部は放射状に、また内底面は十字に施される。中国産の可能性をもつ。
中国産 備前焼	890、891は備前焼である。ともに口縁端部が内傾し、外面に凹縁が施される。これらは乗岡編年の中世6期に相当する。
中国産磁器	892～895は中国産磁器である。892は白磁皿である。口縁部端反のもので、16世紀前半に比定される。893は白磁小坏で、復元底径3.1cmを測る。894は漳州窯系青花碗である。895は景德鎮窯系



AA' 5,000m

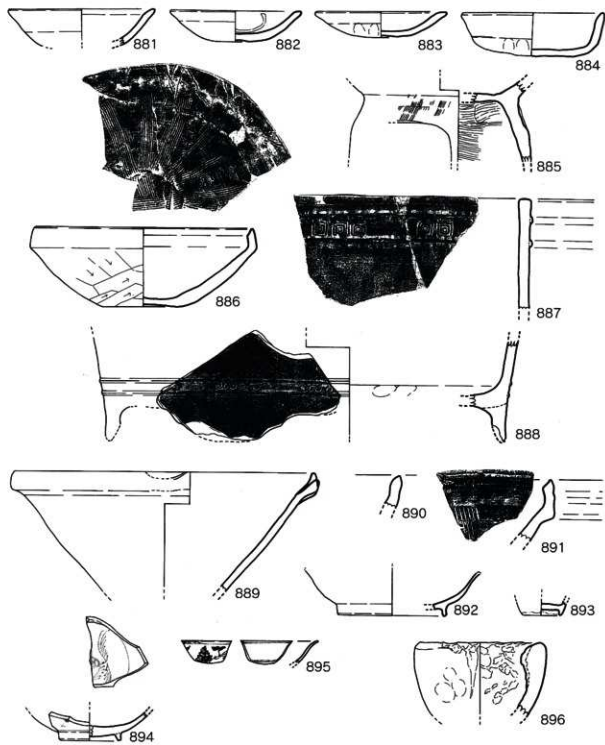


BB' 5,000m



- | | |
|--------------------------|---------------------|
| 1 黄褐色土層(褐灰色土層が露る) | 15 黒褐色土層(暗褐灰色ブロック型) |
| 2 黄褐色土層(黄褐色の炭化物) | 16 黄褐色砂質土層 |
| 3 黄褐色土層(黄褐色の塊土) | 17 黄褐色粘質土層 |
| 4 反黄褐色土層(黄褐色の塊土、炭化物) | 18 反黄褐色土層 |
| 5 反黄褐色土層(黄褐色の塊土) | 19 黄褐色土層(15層に類似) |
| 6 黄褐色土層(1層とはほぼ同じ、褐灰色土層) | 20 褐灰色土層 |
| 7 黄褐色土層(5層に比べ、褐灰色土少) | 21 黄褐色土層 |
| 8 黄褐色土層 | 22 黄褐色土層 |
| 9 褐灰色土層(塊土、炭化物を多量に含む) | 23 褐灰色砂質土層 |
| 10 反黄褐色土層(部分的に黄褐色土あり) | 24 黄灰色粘質土層 |
| 11 褐灰色土層(井筒内埋土、しまりが悪い) | 25 黄灰色粘質土層(黄褐色土層) |
| 12 細かい黄褐色土層 | 26 黄褐色砂質土層 |
| 13 褐灰色土層(全体に黄褐色土が露る) | 27 黄褐色砂質土層 |
| 14 褐灰色土層(13層に比べ、黄褐色土が少な) | 28 褐灰色土層 |

第206図 大友75次SE170



第207图 大友75次SE170出土遺物(1)

青花皿である。16世紀後葉以降のもの。口縁部端反で、体部外面に牡丹唐草文がみられる。小野分類の皿B群に相当する。15世紀半葉～16世紀前半のもの。

埴壇 896は土師器埴壇である。内面には津が厚く付着している。

銅線 897は断面円形の銅線である。

五輪塔 898は五輪塔の地輪部で、柄穴等はいらない。

遺構の時期 以上の遺物のなかには14世紀代まで遡る古相のものもみられるが、新相の遺物の時期から、本遺構の時期は16世紀後葉～末に位置づけることができよう。

(4) SE186

位置と検出面 SE186(第209図)は調査区中央やや北寄りのE61区に位置する。第II面で検出されたもので、本遺構の周辺には、遺構が密集しており、SE113やSK187などがみられる。また、遺構の南側には幅1.5mの水路が走っており、本遺構も南半が水路により破壊される。

切り合い関係 周辺遺構との前後関係は、本遺構の南側がSE113に切れ、北東側でSK187に切られる。

掘り方は円形基調を呈すると思われるが、

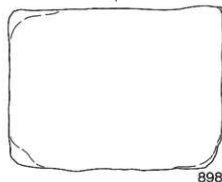
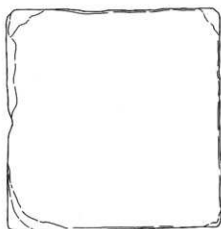
南半が水路により破壊され、全形は不明である。その規模は、東西が2.5m、南北の現存長が1.5mを測る。この掘り方がほぼ垂直に掘り下げられるが、0.6～1.0mのところ一旦段がつくなど、やや雑な感じの掘り下げである。検出面から1.6m下がったところで平坦にし、この面のやや西寄りに井筒を据える円形の土坑が掘られる。井筒を据える土坑は径0.5mで、検出面から3.1m下がっても底に達していない。

井筒 井筒には、円形の木製桶が使用されている。一部で桶の痕跡が明瞭に残っており、その大きさは径0.5m、高さ0.6mである。下段の円形土坑の径とほぼ同じ大きさの桶で、これを何段にも重ねたものと思われる。上段の大きな掘り方内も桶を積み重ねたと推定され、桶の周囲の掘り方内を順次入念に埋めている。掘り方の充填土は、層厚0.05mの黄褐色土(5層、7層、9層など)を間に挟みながら、0.2～0.6mの層が積まれた様子が観察される。しかし、中程から上はSE113により切られており、残存していない。

井戸廃絶後の井戸封じに伴う痕跡については、上層が残存していないので不明である。現存する土層などには、井戸封じに関すると思われるものは観察できない。

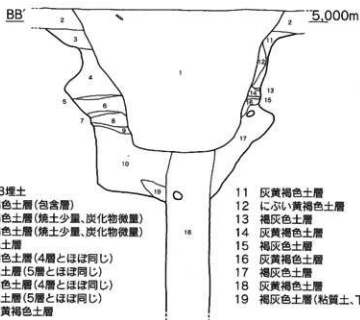
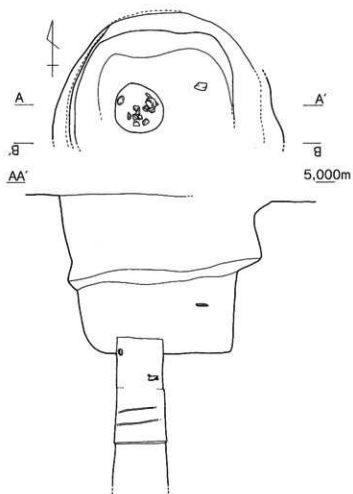
出土遺物(第210図)には、土師質土器、京都系土師器、瓦質土器、中国産磁器などがある。

土師質土器 899～905は底部糸切りの土師質土器である。いずれも体部内面にクロコ痕を残すものである。899は小型品で、口径5.6cmである。体部は斜方向に立ち上げられ、口縁端部を上方に押し上げる感じでおさめる。後述する口径の大きなものと、口縁形態が異なる。900～905は、口径9.5～13.2cmのもののみられる。この間で、口径により2～3に分かれるものと思われるが、本遺構資料だけはそ



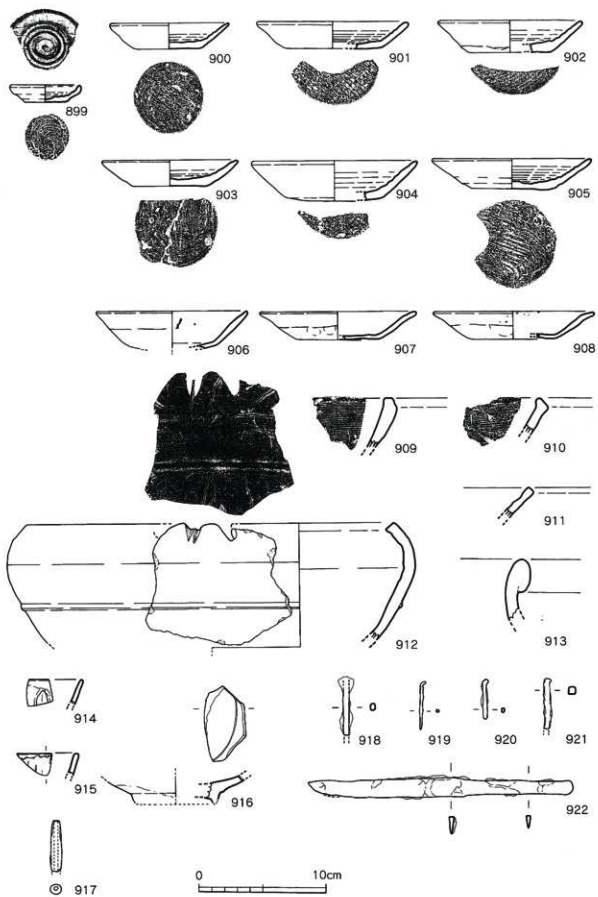
0 10 20cm

第208図 大友75次SE170出土遺物(2)



0 1 2m

第209図 大友75次SE186



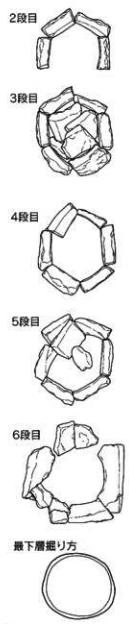
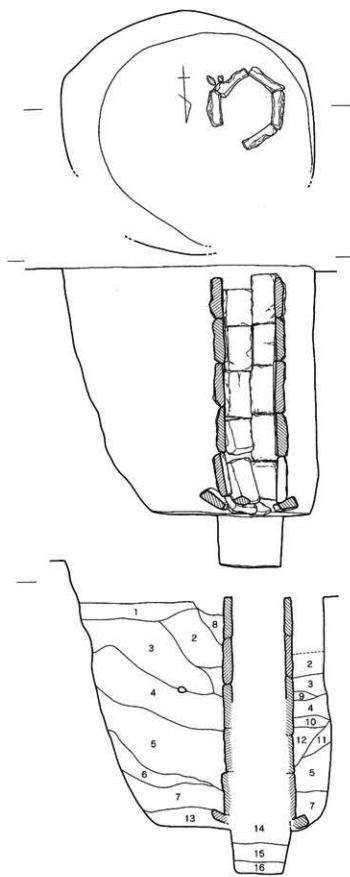
第210图 大友75次SE186出土遺物

の抽出が難しい。いずれも体部内面下半のクロコ痕を残すもので、体部は直線的に口縁にいたる。これらは、16世紀前葉に位置づけられる。

- 京都系土師器 906～908は京都系土師器で、口径12.0～12.8cmを測る。いずれも薄手で、口縁部付近がわずかに外方に折れる。全体のプロポーシヨンの特徴として、やや平底状を呈する。これらは、京都系土師器1期に比定される。
- 瓦質土器 909～912は瓦質土器である。909、910は鉢で、内面に横方向のハケメがみられる。909は口縁部付近が肥厚し、やや内湾気味におさめる。910は口縁部内側を上方に積み出す。ともに14世紀代のものである。911は鍋で、16世紀代のもの。912は口縁部が大きく内湾する鉢である。体部下半には、断面三角形の突帯が付される。また、口縁部には大胆な刻みが施される。15、16世紀に位置づけられよう。
- 備前焼 913は焼締陶器備前焼甕である。口縁部外面の玉縁があまり発達しておらず、15世紀代のものか。
- 中国産磁器 914～916は中国産磁器である。914は青磁碗で、外面に鱗蓮弁文がみられる。13世紀のもの。915も青磁碗で、外面に刺先蓮弁文がみられる。15世紀後半～16世紀前半のもの。916は白磁碗底部で、12世紀代のものか。
- 土鏃 917は土鏃である。
- 鉄製品 918～922は鉄製品である。このうち918～921は釘である。いずれも頭部が折り曲げられ、断面方形を呈するものである。922は刀子で、全長21.0cm、刃渡り12.4cmを測る。
- 刀子
- 井戸の時期 以上の出土遺物の中には古相のものも含まれるが、16世紀前葉に位置づけられる。

(5) SE206

- 位置と検出面 SE206(第211図)は調査区北端の中央付近であるE60・F60区にまたがり位置する。第II面で検出されたもので、北側が調査区外に及ぶ。本遺構の南側には、土坑や井戸などの大型遺構はみられないが、柱穴などが多数みられる。しかし、調査区内において、本遺構は他遺構との重複はみられない。
- 規模 掘り方は一部が調査区外に及ぶため全形は不明であるが、円形基調を呈するものと思われる。その規模は、東西2.7m、南北2.6mを測る。この掘り方を2.6m下掘り下げて、一旦平坦にする。壁は、西側から北側にかけてはほぼ垂直に、またそれ以外はやや斜めに立ち上がる。一旦平坦にされた面は、ほぼ円形を呈し、その規模は径2.3mである。井筒を据える土坑は、中央から南西に寄った位置に据えられる。土坑は径0.65～0.75mの円形で、深さは0.5mである。土坑の壁の立ち上がりは垂直気味で、床面は平坦である。
- 井筒 井筒の最下段には円形の木製桶が据えられていたと推定されるが、その痕跡は残存しない。円形の掘り方と上段の石組の始まりから考えて、桶は径0.65～0.7m、高さ0.5～0.55mほどであったと推定される。最下段に桶を据えた後、凝灰岩製板石を花卉状に斜めに据える。板石は割れているものもあるが、5～6枚が使用されていたようである。板石の大きさは0.4～0.7mで、大きさや形状が揃いない石材が用いられている。これら花卉状の石を基盤にするように、この上に凝灰岩製の板石を六角形に組み井筒を形作る。凝灰岩製板石は、縦0.4～0.5m、横0.4mほどである。六角形の石組の内径は、0.6mを測る。この石組は最上段から数えて5段積まれている。
- 充填土 石組背後の掘り方内に、層厚0.2～0.5mの土を順次充填している。井筒東側の充填土は、石を組み上げる毎に掘り方の壁から斜めに充填している。井筒西側は、東側とは異なりやや細かく充填していることが分かる。
- 井筒内土層 井筒内には、14層、15層、16層が堆積する。下層に堆積する15層、16層は層厚0.1～0.2mで、最下層の16層には砂質土が混ざる。15層、16層は、井戸が使用されている段階での自然堆積層だと思



- 1 黒褐色土層
 - 2 1層と同じ(1層より暗い)
 - 3 黒褐色土層(黄褐色土ブロック多)
 - 4 3層と同じ(3層よりやや暗い)
 - 5 黒褐色土層(黄褐色土ブロック多)
 - 6 黒褐色土層(黄褐色土ブロック少)
 - 7 にぶい黄褐色土層
 - 8 灰黄褐色土層
 - 9 暗褐色土層
 - 10 黒褐色土層
 - 11 暗褐色土層
 - 12 褐灰色土層
 - 13 黒褐色砂質土層(1cm大のレキ多)
 - 14 暗褐色土層(少量の炭化物)
 - 15 灰黄褐色土層
 - 16 褐灰色土層(黒褐色砂質土含む)
- } 井筒埋土

0 1 2m

第211図 大友75次SE206

われる。井筒内の大部分は14層により埋まっている。14層は炭化物の混ざる暗褐色土で、井戸廃絶時に意識的に埋めたものと考えられる。

井戸廃絶後 井戸廃絶後の井戸封じに伴う行為については、前述したように井筒内に土砂を充填したことが想定されるのみで、このほかに目立った痕跡は認められない。井筒石組みも最上層まで残存しており、井戸に対する物理的な行為は行なわれていない。

出土遺物 出土遺物（第212図）には京都系土師器、瓦質土器、土製品などがある。

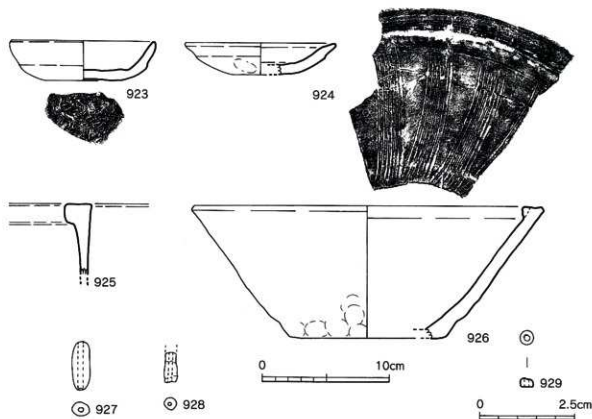
京都系土師器 923、924は京都系土師器である。923は丸底の底部から体部を立ち上げるものである。体部全体にナデが施され、体部下部に段がつく。復元口径は11.6cmを測る。924は厚手で、復元口径12.0cmである。口縁部周辺に強いナデが施され、口縁部は短く外反する。端部は尖り気味である。これらは、京都系土師器3期に比定される。

防長系撞鉢 925、926は瓦質土器である。925は大型の火鉢口縁部の破片資料である。体部は直立し、口縁部内側に断面方形の突帯を付す。16世紀代のものである。926は防長系の撞鉢である。口縁端部内側に断面三角形突帯が付される。内面の摺り目は7本単位で、比較的密接している。本品も16世紀代に比定されるであろう。

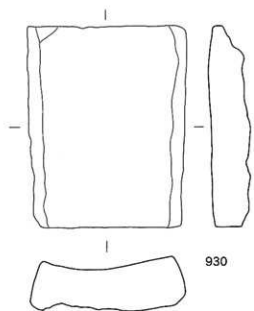
土錘 927、928は土錘である。927は完形品で、長さ3.8cm、重量4.4gを測る。928は欠損品である。

ガラス玉 929はガラス製の玉である。

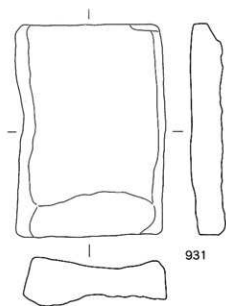
石組部材 次に、井筒石組みの部材のうち、いくつかを紹介する（第213図）。石組は6段に及び、6段目の花弁状石組みを除き、長方形に加工された凝灰岩製の板石を六角形に組む。その大きさは、縦45～50cm、横35～40cmほどで、全体の20数個がほぼ同じ規格を呈する。内面はわずかに凹み気味に作られるものが多く、丁寧に加工され滑らかに仕上げられている。両側面と上端面、下端面は切り



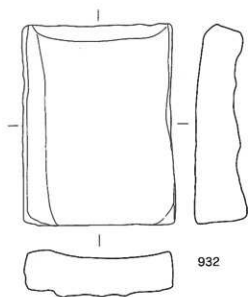
第212図 大友75次SE206出土遺物(1)



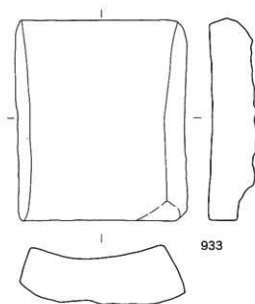
930



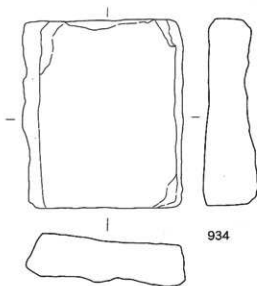
931



932



933



934



第213图 大友75次SE206出土遺物(2)

落とされ、平滑にされている。両側面は、井筒内側にあたる凹面に対し鈍角をなす。石を六角形に組む際に、隙間ができないようにするための工夫であったと思われる。厚さは7~11cmで、井筒外側にあたる面は粗加工のままである。

井戸の時期 以上の出土遺物などから、本井戸は16世紀後葉~末に位置づけられる。

(6) SE216

位置と検出面 SE216(第214図)は調査区中央やや南寄りのE62区に位置する。第Ⅱ面から検出されたもので、周辺にはSE149、SK148、SK191、SK217などの大型遺構がみられる。本遺構を含めこれらは互いに近接しており、本遺構の上部にはSK148があり、本遺構とSK148の両者をSK259が切る。切り合いの順序を整理すると、SE216→SK148→SK259となる。

規模 掘り方は、北西隅をSK259に切られるが、やや不定形気味の長方形を呈する。その規模は、東西1.3~1.6m、南北1.6~1.7mを測る。大友75次調査で確認された井戸の中では、掘り方が最も小規模である。この掘り方が垂直気味に掘り下げられるが、北辺は0.2m下がったところで段がつく。検出面から2.7m掘り下げたところで、一旦平坦にされる。壁は、一部に凹凸がみられるが、ほぼ垂直に掘り下げられている。一旦平坦にされた面は、ほぼ円形を呈し、その規模は径1.1mである。井筒を据える土坑は、中央からやや東に寄った位置に掘られる。土坑は径0.4mの円形で、深さは0.7mである。土坑の壁の立ち上がりは垂直で、床面は平坦である。

井筒 井筒の掘り方内には石組み等が残っておらず、木製品が据えられていたと推定される。その形状は、掘り方が円形であることから、木製桶であったと思われる。しかし、その痕跡は残存しない。円形の掘り方規模から、桶は径0.4mほどであったと推定される。本調査区内の他の井戸で使用されていた桶が、いずれも径0.7m程であったのに比べると小型である。桶は下段の円形土坑に据えられた後、さらに上へ積み重ねられていたことが観察される。

充填土 桶が積まれると同時に、その背後の掘り方内には、層厚0.3~0.5mの土を順次充填している。桶の井筒痕跡は検出面した1.3mまで確認することができる。掘り方内の充填土の層(13層~16層)が積み上げた桶と対応すると推定されるので、上段の掘り方内に4段、下段の円形土坑分も含むと、検出面下1.3mまでに、6段の桶が重ねられていたものと思われる。

井筒内土層 井筒内には、17層、18層が堆積する。下層に堆積する18層は黒褐色粘質土で、井戸使用時の自然堆積層の可能性が高い。17層は黒褐色土で、井戸廃絶後の埋土であると思われる。

井戸廃絶後 検出面下1.3mまでは、井筒の痕跡や掘り方充填土層が残っており、大きく変化が加えられている。井戸廃絶後のことと思われ、井戸を封じるに係わる何らかの行為であったと推測される。

出土遺物 出土遺物(第215図)には、土師質土器、京都系土師器、瓦質土器などがある。

土師質土器 935は土師質土器である。底部は糸切りで、体部が斜方向に直線的にのびる。体部内面にはクロコ痕がみられる。16世紀前葉に比定される。

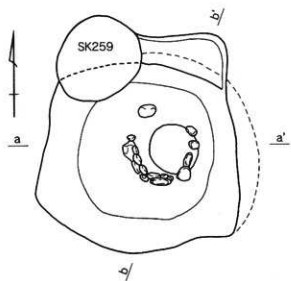
京都系土師器 936は京都系土師器である。薄手で、口径は9.3cmである。口縁部は外方に向かい引き出される感じで、端部は尖りきみである。京都系土師器1期ないしは2期に比定される。

瓦質土器 937~939は瓦質土器である。937、938は両者とも小破片であるが、鉢の口縁部と思われる。口縁端部は内外に肥厚する。939は突帯部である。

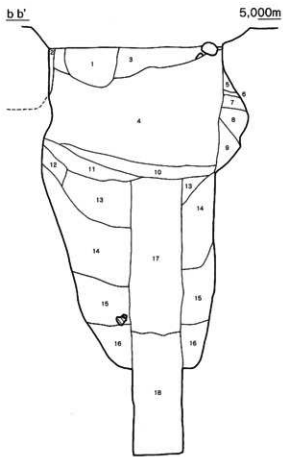
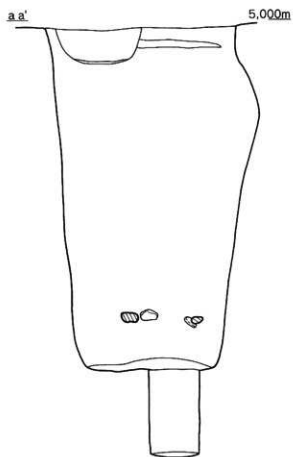
鉄製釘 940は鉄製釘である。頭部を折り曲げ、断面方形を呈するものの完形品で、長さ4.4cmを測る。

砥石 941は砥石である。

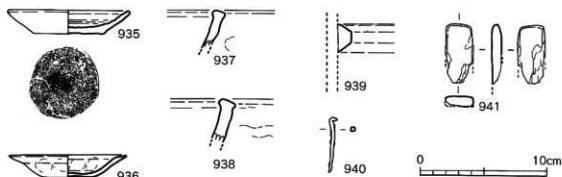
井戸の時期 以上の遺物から、本遺構は16世紀前葉に位置づけられよう。



- 1 黒褐色土 (焼土、黄褐色ブロック混)
- 2 黒褐色土
- 3 黒褐色土
- 4 黒色土
- 5 褐灰色土
- 6 灰色土 (粘性あり)
- 7 にぶい黄褐色土
- 8 灰黄褐色土
- 9 黄灰色土 (粘性あり)
- 10 暗褐色土
- 11 灰黄褐色土 (砂質混り)
- 12 黒褐色土
- 13 黒褐色土
- 14 灰黄褐色土
- 15 にぶい黄褐色砂質土
- 16 黒褐色土
- 17 黒褐色土
- 18 黒褐色粘質土



第214図 大友75次SE216



第215図 大友75次SE216出土遺物

(7) SE445

位置と検出面 SE445 (第216図) は、調査区西端のD61・D62区にまたがり位置する。第Ⅲ面で検出されたもので、西半分が調査区外に及ぶ。本遺構の南側には、大型の不定形土坑であるSK445がみられる。また、同位置の第Ⅱ面からはSK130が検出されている。層位的な関係から、本遺構がSK130に先行する。

規模 遺構の西半分が調査区外に及び、北側が一部水路により破壊されているため。全体の形状は不明であるが、調査区内の形状からみて、本来は円形基調を呈していたと推定される。その規模は、南北が3.2m、東西が調査区内で1.8mを測る。

検出面から1.2m下げたところで平坦にするが、壁は南側が急で、東側は比較的緩やかである。一旦平坦にされた面は円形を呈すると思われ、南北2.8mを測る。この面から井筒を据える土坑が掘り込まれるものと思われるが、本調査区内では確認されていない。

遺物出土状況 遺構内からは土師質土器と京都系土師器がまぎれあって出土している。いずれも床面から浮いた状態である。

出土遺物 出土遺物 (第217、218図) には土師質土器、京都系土師器、中国産磁器などがある。

京都系土師器 模倣 942～956は京都系土師器模倣の土師質土器である。これらは全て底部系切りであるが、次に示す3点の理由から、京都系土師器を強く意識して作られたものと理解できる。①京都系土師器と同様な色調、胎土をもつ。②底部を丸底状にしたり、口縁部を外反気味にするなど、京都系土師器の形態を強く意識する。③法量的にいくつかに分けられる。以上である。

色調・胎土 ①について、同時期の土師質土器として中世大友府内町跡から出土するものは、一般的に茶褐色を呈する。これに対し模倣土器は灰褐色～白褐色を呈し、明らかに一般的な土師質土器と異なり、京都系土師器と同様な色調を呈する。また、稀に出土する大内系と称される土器も白色を呈する。しかし、大内系の土器の白色とも明らかに異なる。本遺構出土の942～956は、全て灰褐色～白褐色を呈する。

器形 ②について、底部系切り難しを行ないながら、底部をあえて丸底状に整えているものがある。947、948、951～954で、系切り後に、底部中央部を押し出し気味にするもの、底部の押し出しは行なわないが体部立ち上がり部をナデなどにより丸く仕上げるものなど、丸底模倣にもいくつかの方法が確認できる。ただし、念入りに仕上げられ一見すると系切りの底部とは気づかないものから、仕上げの度合いが少ないものまでバリエーションがみられる。また、系切りのままのものもあり、全体として丸底化への意識は統一されていない。

口縁部が外反するものは、943～945、951、952、954～956である。このうちの多くが口縁部を短く外反させる。口縁部周辺を強くナデを施すことにより、わずかに反らせるもので、京都系土師器

に見られる器形的特長と類似する。

ナゲ上げ

以上のように、形態的に強く京都系土師器を意識して作られているが、京都系土師器が有する内底面から体部へのナゲ上げについては全く認められない。ナゲ上げは全体のプロポーションとは直接関係ないが、京都系土師器製作時の重要な約束事である。模倣土器にこのナゲ上げがなされなかったのは、イ外見上の形態模倣に重点をおき、形態に関係ないものはあえて省略した。口模倣したかったが何らかの制約があり実現することができなかった。以上の場合が想定される。イの場合、使用する側も、内面のナゲ上げの有無については全くこだわりはなく、その有無は大きな問題ではなく、形態や色調が使用する側にとって最も重要であったため、製作者はナゲ上げをあえて行わなかったと考えられる。とすれば、本来の京都系土師器と模倣土器が同価値で扱われたことが推測される。ロの場合、本来の京都系土師器の製作工程から土器の細部にいたるまでを含めて、儀礼用の土器としての価値が認められており、結果的に形態が類似しても糸切りを行なうものは、本来の京都系土師器と同列には認められず、京都系土師器にみられる象徴的な特徴であるナゲ上げについては模倣を許されなかった可能性が考えられる。このように考えた場合、京都系土師器を使用する諸儀礼に明確な規制があり、類似しているとは言え、模倣品の入り込む余地はなかった可能性も出てくる。ただし、本遺構では京都系土師器と共伴しており、これらを同時に使用しなかった可能性も出てくる。イの立場であれば全く問題はないが、ロの立場の場合は、模倣品を含む儀礼用土器を用いるのは、儀礼を行なう人、あるいは儀礼自体が、京都系土師器だけを用いて行なう儀礼とは区別されていた可能性が考えられる。

クロロ痕

また、各土器の体部内面下半、あるいは下部にクロロ痕がみられる。15世紀後半以降、中世大友府内町跡ではクロロ痕を残す土師質土器が主体をなす。これらはクロロ痕だけで言えば、クロロ痕が太いものから細いものへ、クロロ痕が内外面から内面のみ、そして内面下半のみと変化する。器形的には、体部が直立気味のものから、斜方向に立ち上がるものへと変化する。本遺構の模倣土器は、色調などが大きく異なるものの、クロロ痕を有する在り土器の系譜のなかで考えられる要素を多くもつもので、編年あるいは製作集団を考える際に大きなヒントになりそうである。

口径

③について、本遺構から出土したものの口径についてみてみると、I群：口径9cm前後のもの、II群：口径11cm前後のもの、III群：口径12cm前後のもの、IV群：口径13cm前後のもの、V群：口径16cm前後のものに分けられる。I群は942である。後述する共伴の京都系土師器にも9cm前後のものが認められる。II群は943、944、946、947である。これらは、他よりも口径に比し器高が高く、やや深めを感じる。また、体部の立ち上がりが比較的急である。やはり、共伴の京都系土師器に口径11cm前後の一群がみられる。III群は945、948、949、951である。器高はII群とほぼ同じである。口径が大きくなった分、II群よりも扁平な感じを受ける。IV群は950、952～955である。器高はII、III群と同じであるため、さらに扁平な感じが強まる。京都系土師器にも12～13cmのものが、ここで分類したように12cmと13cmに分類するのがよいのか、これらをまとめた方がよいのか判断がつかぬ。V群956である。共伴の京都系土師器にも口径16cm前後のものがみられる。以上のように、模倣土器ではあるが、京都系土師器と同様に4から5段階の法量分化が認められる。分化した口径もほぼ同様である。京都系土師器模倣への強い意識が感じられる。

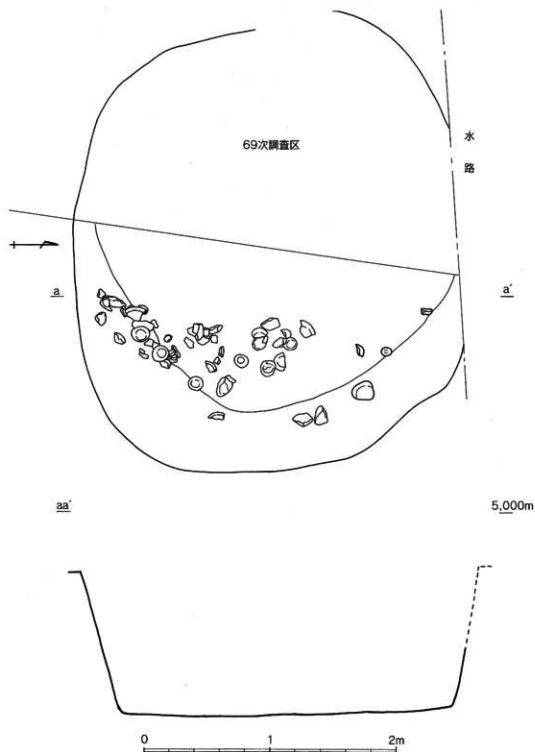
小路遺跡

このような模倣土器がまとまって出土した遺跡として、竹田市久住町小路遺跡（「小路遺跡・上屋敷遺跡」大分県久住町教育委員会 2000年）がある。小路遺跡では、京都系土師器と伴に京都系土師器模倣土器が出土している。本遺跡と同様な特徴を有するもので、一定量の出土が確認されている。小路遺跡出土土器の法量をみると、口径12、13cmものばかりで、これからはずれるものは確認されていない。この模倣土器は府内周辺で製作されたものと考えられるが、本遺構出土品と小路遺跡出土品の法量の差は、単に府内中核と地方の差なのか、あるいは大友氏と家臣の差なのか判然

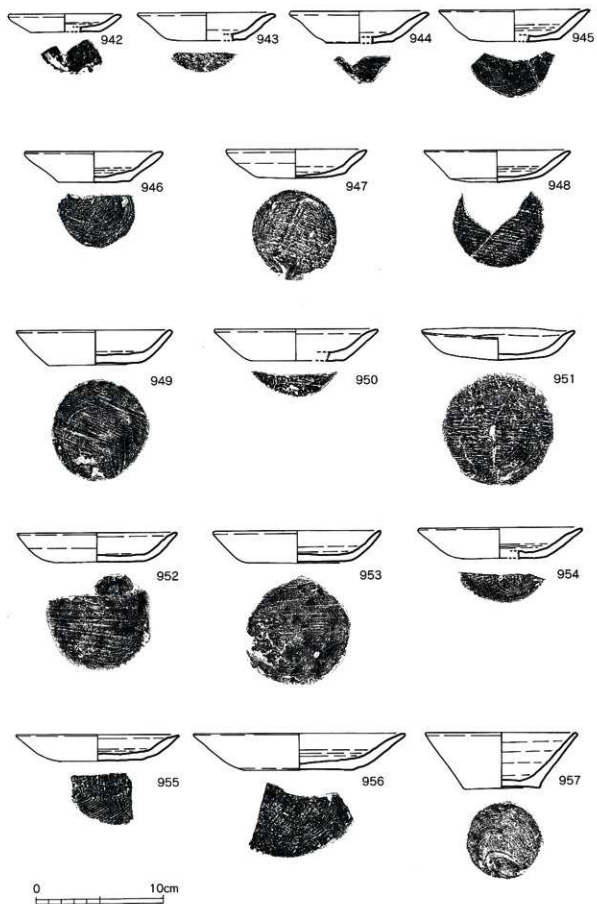
としない。

土師質土器
金ウンモ

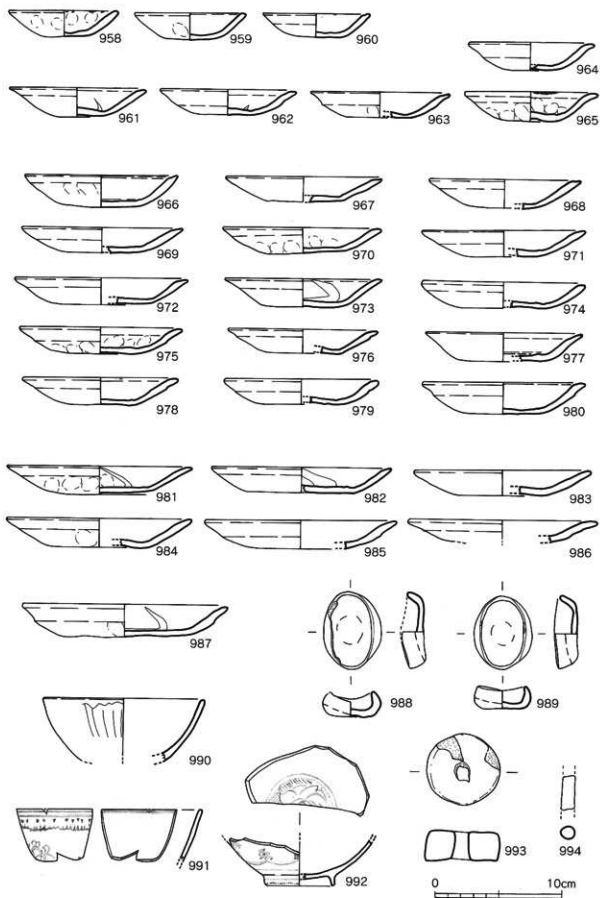
467は口径に比して器高の高い土師質土器である。底部は糸切りで、体部が直線的に斜方向にのびる。全体に深い感じを受ける。本品の最大の特徴は、胎土に金ウンモを含むことである。中世大友府内町跡出土の土師質土器は、14世紀以来基本的に金ウンモを含まない。大分県下の16世紀代の土師質土器で金ウンモを含むのは、これまで二地域が知られている。一つは大野川上流の豊後大野市朝地町一万田氏館跡出土品である。また、もう一箇所は国東半島東南部の国東市安岐町の安岐川下流域周辺出土品である。前者の土器は、坏と小皿を作り分けるもので、坏・小皿とも口径に比し



第216図 大友75次SE445



第217图 大友75次SE445出土遺物(1)



第218圖 大友75次SE445出土遺物(2)

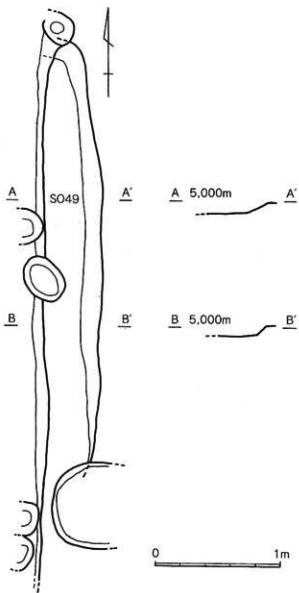
	器高が低い扁平なものである。一方、安岐川下流域周辺のもの、957と同様な器形のものである。このような器形は、大友氏が最も警戒したという田原氏が領する国東半島地域に多くみられる。本遺構出土の957は、安岐川下流域周辺から持ち込まれた可能性が高い。
京都系土師器	958～987は京都系土師器である。全体にやや薄手の作りである。口径により以下のように分類できる。Ⅰ群：口径9cm前後のもの、Ⅱ群：口径11cm前後のもの、Ⅲ群：口径12cm前後のもの、Ⅳ群：口径13cm前後のもの、Ⅴ群：口径15cm前後のもの、Ⅵ群：口径16cm前後のもの。以上である。Ⅰ群は958～960である。口径に比し器高が高いので、深めの感じを受ける。口縁部は外反せず、わずかに960に口縁端部内側のみが外方に折れる。Ⅱ群は961～965である。口径10.0～11.0cmのものがあり、口縁が短く外反するものと大きく外反するものがみられる。Ⅲ群、Ⅳ群は966～980である。口径11.9～13.7cmのものがある。これらは2群に分類したが、一括される可能性も有する。口縁部は外反するが、内面端部のみが外方に折れるものと、外面口縁下に段が付き口縁端部全体が外反するものがみられる。Ⅴ群、Ⅵ群は981～987である。口径は14.0～16.3cmで、口縁形態にはバリエーションがある。以上は、16世紀中葉前後に位置づけられる。988、989は京都系土師器の耳皿である。
中国産磁器	990～992は中国産磁器である。990は青磁碗で、剣先蓮弁文がみられる。15世紀後半～16世紀前半のもの。991、992は景徳鎮窯系青花碗で、小野分類の碗C群あるいはD群に相当する。993は軽石製の有孔円盤で、浮だと考えられる。994は棒状土錘の破片資料である。
本遺構の時期	以上から、本遺構は16世紀中葉に比定される。

5 溝

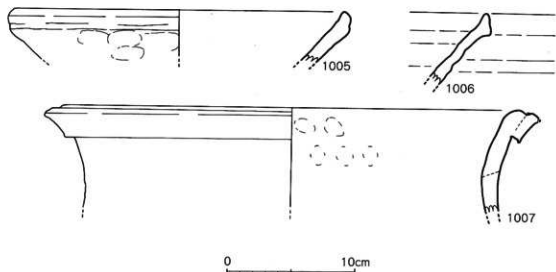
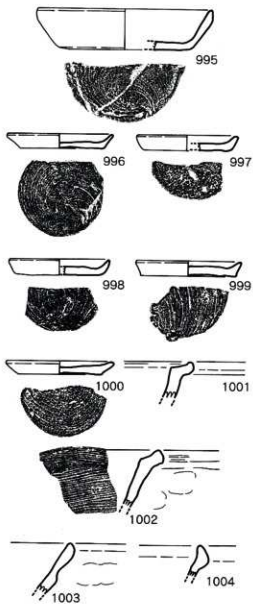
本調査区内の溝はそれほど多くなく、他遺構と重複しているため全容が明らかでないものもある。ここでは、主要な溝について紹介する。

(1) SD049

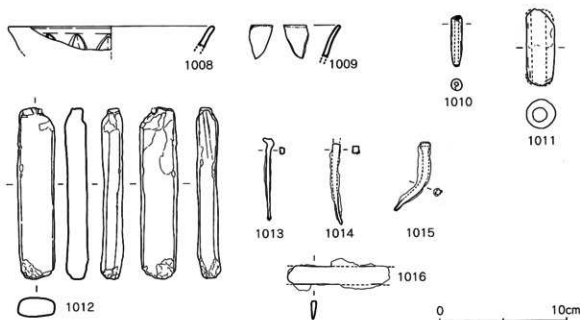
位置と検出面	SD049 (第219図) は調査区南東隅のF63・G63区に位置する。第Ⅱ面で検出されたもので、隣接する溝に切られる。周辺には、SK45、SK48、SK69などの中小の遺構がみられる。このうち、SK45に切られる。
規模	溝は南北方向にのびるものであるが、西側は溝により切れ、南端はSK45により切られるため全容は不明である。規模は、南北の長さが現状で3.3m、幅が現状で0.3～0.4mである。深さは0.1mと比較的浅い。壁は東側しか残存していないが、緩やかに立ち上がる。床面はほぼ平坦で、どちらかに傾斜したりすることはない。
遺物出土状況	溝内からは土器片等が出土しているが、散発的な状況である。出土遺物(第220、221図)には、土師質土器、瓦質土器、須恵器、焼締陶器などがある。
土師質土器 環	995～1000は、底部糸切りの土師質土器である。995は環で、復元口径14.0cmを測る。体部は底部と同じ厚みで立ち上げられており、その立ち上がりは急である。体部は直線的にのびるもので、端部は尖り気味である。
小皿	996～1000は小皿である。口径は8.0～8.6cmを測る。形態からいくつかに分類される。996、997は、体部が底部と同じ厚みで立ち上げられる。その立ち上がりは急である。998は体部が底部から丸みをもち立ち上がる。口縁端部は尖り気味である。999は底部から体部を三角形に引き出す。1000



第219图 大友75次SD049



第220图 大友75次SD049出土遺物(1)



第221図 大友75次SD049出土遺物(2)

は底部と同じ厚みの体部が斜方向にのびる。また、これらの器高は1.1~1.35cmで総体として低い傾向がうかがえる。以上の土師質土器は、14世紀中葉~後葉に比定されよう。

瓦質土器 1001~1003、1005は瓦質土器である。1001、1002は鍋で、口縁部が短く外方に折れる。14世紀代のものである。1003も鍋である。口縁外面下部は強いナデにより凹む。16世紀代のものである。1005は鉢である。口縁端部は上方にやや引き上げられる。14世紀代の所産であろう。

東播系こね鉢 1004、1006は東播系須恵器こね鉢である。

常滑焼 1007は焼締陶器常滑焼甕である。N字状であった口縁部の縁帯が頸部に密着する。15世紀に入るものである。

中国産磁器 1008、1007は中国産磁器である。1008は青磁碗で、外面に錦蓮弁文が施される。1009は白磁口売皿である。

土鐘 1010、1011は土鐘である。1011はやや大型のもので、長さ6cm、径2.3cm、重さ27.7gを測る。

砥石 1012は砥石で、全面が磨面となっている。端部に穿孔がみられる。

鉄製品 1013~1015は鉄製の釘である。いずれも頭を折り曲げ、断面方形を呈するものである。1016は刀子である。

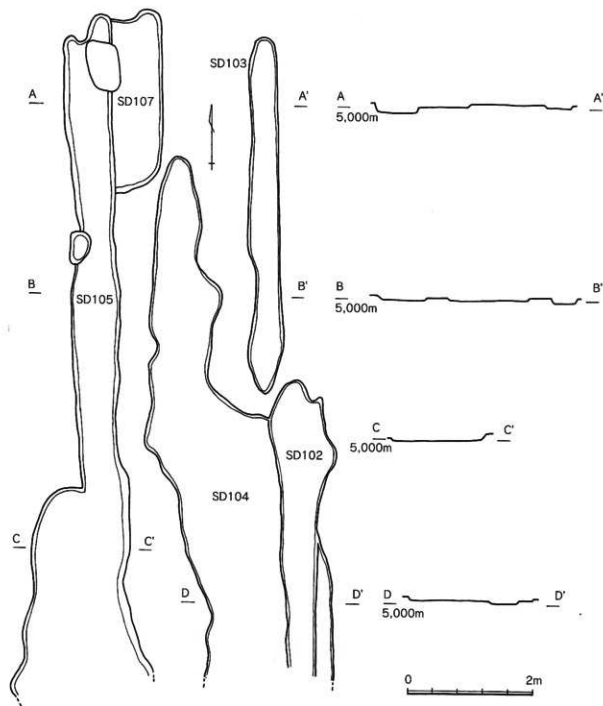
遺構の時期 以上の出土遺物には14~16世紀代のものがみられる。一部新相のものを混ざり込みと考えれば、本遺構の時期は14世紀中葉~後葉に位置づけられる。

(2) SD102、SD103、SD104、SD105、SD107

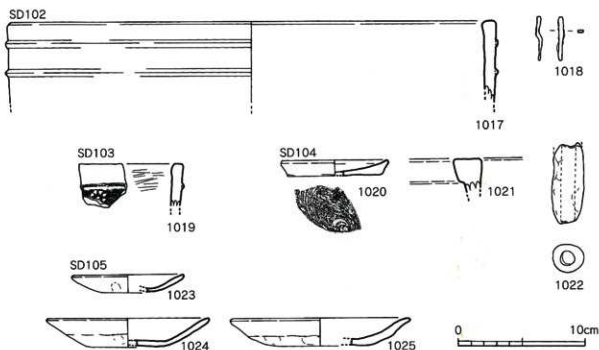
位置と検出面 SD102、SD103、SD104、SD105、SD107 (第222図) は、調査区西側のD61・D62・E62区にまたがり位置するもので、第I面において検出された。第I面は比較的遺構が疎らで、攪乱土坑も多い。溝は全て南北方向に走るもので、これらの西側にも同方向に走る溝(SD110、SD111)がみられる。

規模 溝はすべて同方向に走るが、一部重複したりする。溝の幅も0.4~1.5mと規模にバラつきがある。また、深さも0.1mと比較的浅い。

- SD102 SD102の出土遺物(第223図)のうち、1017は瓦質土器火鉢である。円筒形の器形で、外面口縁したに2条の低い突帯が付される。突帯間に本来はスタンプ文がみられる。1018は銅製品である。器種不明であるが釘か。以上は16世紀代のもの。
- SD103 SD103出土遺物(第223図)は、1019の瓦質土器火鉢がある。外面口縁下に突帯とスタンプ文がみられる。16世紀代の所産である。
- SD104 SD104出土遺物(第223図)のうち、1020は土師質土器小皿である。底部糸切りで、体部は底部から短く引き上げる。14世紀代後半のものか。1021は瓦質土器火鉢である。口縁部内面が方形に肥厚する。16世紀代のもの。1022は大型の土鍾である。現状で長さ6.4cm、重量32.7gである。



第222図 大友75次SD102,SD103,SD104,SD105



第223図 大友75次SD102,SD103,SD104,SD105出土遺物

SD105 出土遺物 SD105 (第223図) 出土遺物は、1023～1025の京都系土師器である。1023、1024は薄手のもので、京都系土師器1期に比定される。1025はやや厚手のもので、口縁部が外反する。京都系土師器2期のものである。このほか中国産青花が出土している(第243図、遺物説明169頁)。

(3) SD212

位置と検出面 SD212 (第224図) は調査区東端のG60・G61・G62・G63に位置する。検出されたのは第1面であるが、工業用水管埋設に伴う攪乱で周辺は大きく乱されている。

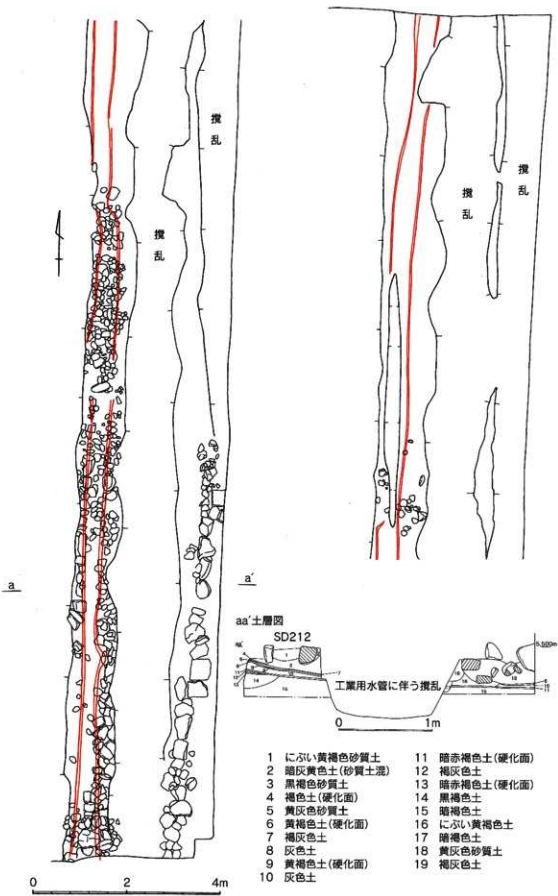
規模 溝は大友府内町を南北に走る4本の街路のうち、第2南北街路の西側側溝であると考えられる。第2南北街路は大友氏館の東側を通る街路である。今回検出した側溝は、真北からわずかに東に振れた主軸をもつ。用水管工事のため大きく乱され、道路面に相当する部分はほとんど残存していないが、側溝はかろうじて残存していた。溝の両側は、5～20cm大の礫で護岸がなされており、幅0.2～0.3m、深さ0.1mを測る。

道路面 また、土層図をみると、道路面を表す硬化面が何層か確認できる。これによれば、道路面は今回検出したSD212の西側まで及んでいた時期があることが分かる。

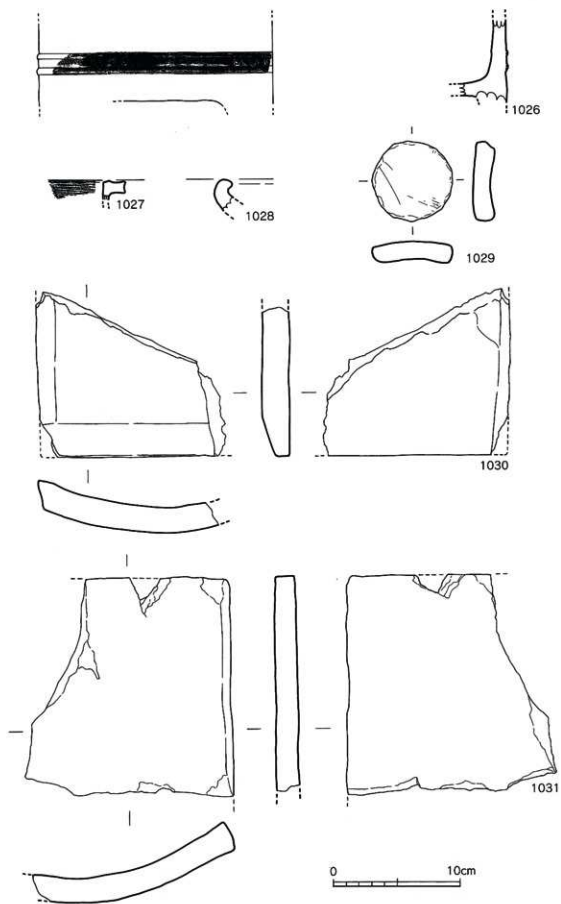
上層出土遺物 出土遺物(第225～230図)のうち、上層からの出土遺物は1026～1033である。このうち1026～1027は瓦質土器である。1026は火鉢の底部ちかくである。外面に2条の低い突帯が付され、その間に双頭蕨手流雲文のスタンプが施される。底部には脚が付されるが欠落している。16世紀代のものである。1027は鍋である。口縁部外面最上部に鈎状の突帯が付されるものであるが、突帯は高さ1cm余りと比較的高い。13世紀末～14世紀前半か。

1028は焼締陶器備前焼の壺で、口縁部が短く外反する。16世紀代後半のもの。

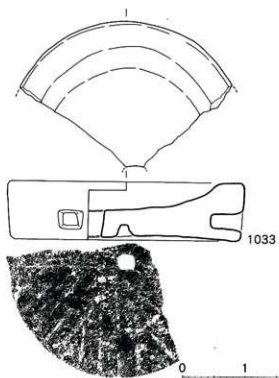
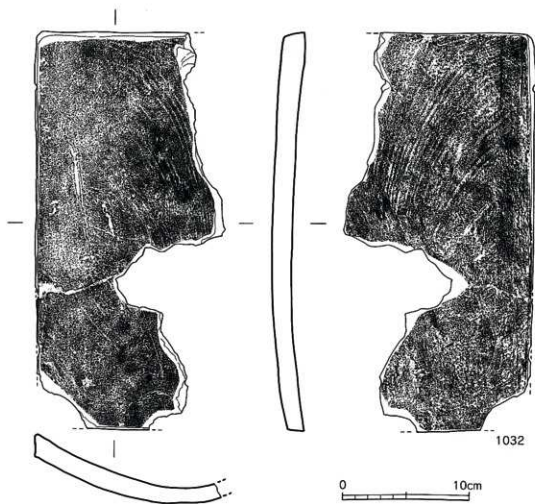
1029は円盤状土製品である。瓦質土器片を加工・整形して作ったものである。



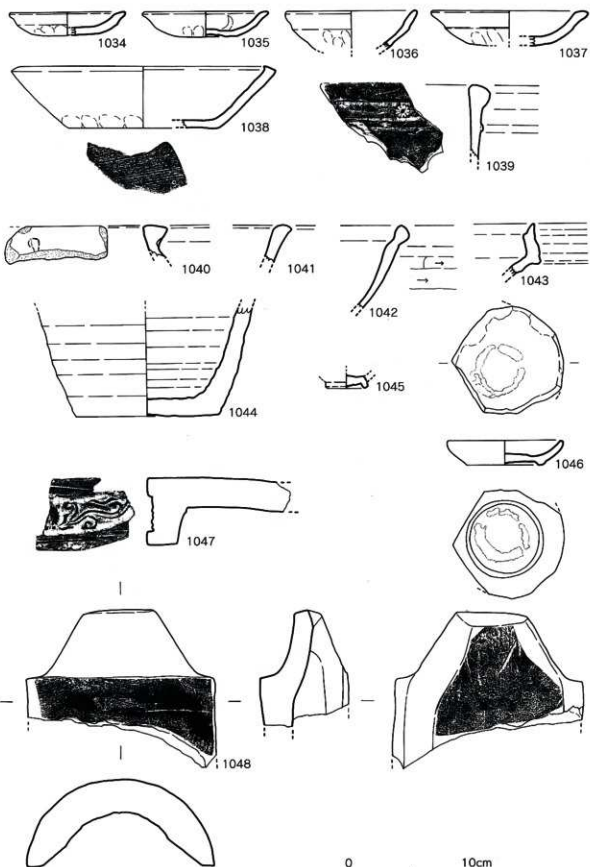
第224図 大友75次SD212



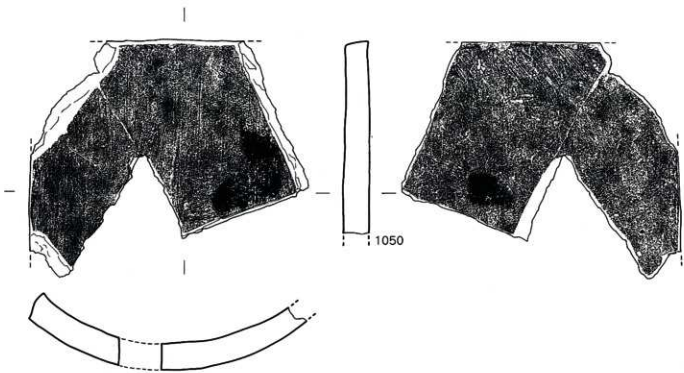
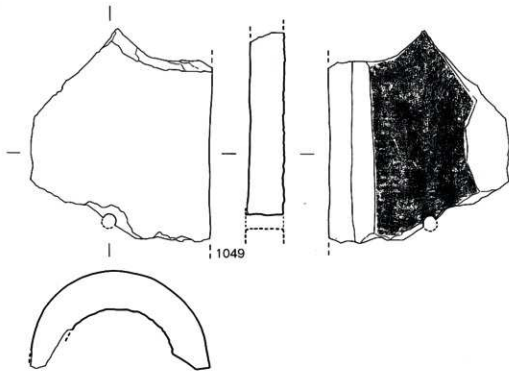
第225圖 大友75次SD212出土遺物(1)



第226图 大友75次SD212出土遺物(2)



第227图 大友75次SD212出土遺物(3)



第228圖 大友75次SD212出土遺物(4)

1030～1032は平瓦である。このうち1032は全長が分かる資料で、その長さは31.2cmである。また両面にコビキ痕が残る。

1033は挽白の上白である。天場の深さは約3cmで、側面には挽手穴がみられる。下面の目は、中央の芯棒受けを中心に8分割されていたものと思われる。

下層出土遺物

1034、～1055は下層出土遺物である。

1034～1037は京都系土師器で、口径は9.0～12.2cmである。1034、1037は厚手で、強いナデに伴い外面口縁下に軽い段が付き外反する。1035、1036はやや薄手のものである。以上は、京都系土師器2、3期に位置づけられている。

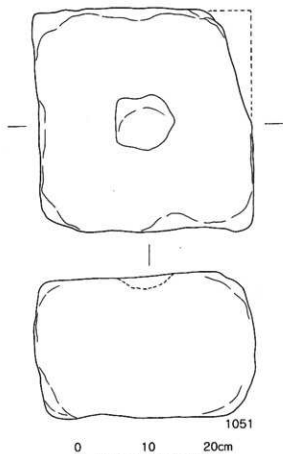
1038～1042は瓦質土器である。1038は鉢である。器高は口径に比し4.8cmと低く、扁平な感がある。口縁端部内側がわずかに肥厚する。16世紀代のものか。1039は火鉢である。口縁外面が肥厚し、その下部にスタンプ文と突帯が付される。16世紀後葉以降のものである。1040は甕である。口縁部外面は断面三角形に肥厚する。肥厚部下には刺突文が施される。16世紀代のものである。1041は鉢である。16世紀代か。1042は鍋である。丸底を呈するもので、外面には横方向のヘラズリが施される。16世紀代のもの

1043、1044は焼締陶器備前焼である。1043は摺鉢である。口縁端部は内傾しており、上方に向け摘み上げられている。乗岡彌年の近世1期に相当する。1044は壺の底部と思われる。ロクロ痕がみられることから、16世紀後葉以降のものか。

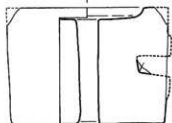
1045は中国産白磁小坏底部である。1046は瀬戸美濃系鉄釉皿で、見込みと外底面には砂目積みの痕跡がみられる。

1047～1050は瓦である。1047は軒平瓦で、中心飾りの蓮華文から唐草文が展開される。1048～1049は丸瓦である。1050は平瓦で、両面にコビキ痕がみられる。

1051、1054、1055は五輪塔の部材である。このうち1055は凝灰岩製の地輪である。33.4×31.3cmで、高さは22.1cmを測る。上面に水輪部との接合のための凹部がみられる。1054は凝灰岩製の火輪部である。上部中央には空風輪部との接合のための凹部がみられる。この凹部を中心に十字形の彫り込みが施される。本来の五輪塔では必要ないものと考えられることかたら、この部材が再利用される時点で加えられたものと思われる。一辺約34cm、高さ20.2cmを測



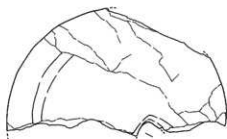
第229図 大友75次SD212出土遺物(5)



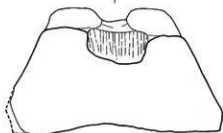
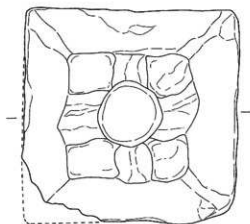
1052



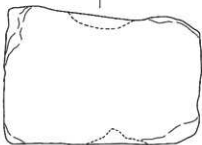
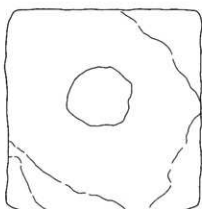
0 10cm



1053



1054

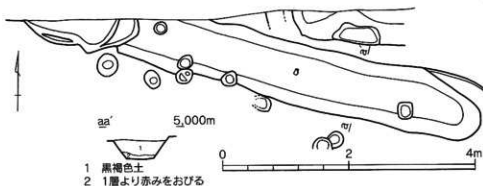


1055

0 10 20m

1052:S=1/4, 1053~1055:S=1/6

第230圖 大友75次SD212出土遺物(6)



第231図 大友75次SD503

る。1055は凝灰岩製の地輪部である。一辺約32cm、高さ19~21cmを測る。上面の中央に水輪部との接合のための凹部がみられる。

1052、1053は石臼である。1052は茶臼の上臼である。側面に拱手穴が認められる。下面の目は8分割である。1053は挽臼の上臼である。側面中央に拱手穴がみられる。

遺構の時期 以上から、SD212は16世紀後葉~末に位置づけられる。

(4) SD503

位置と検出面 SD503(第231図)は第Ⅲ面で検出された。遺構は調査区東北隅のF60・G60・F61・G61区にまたがり位置する。溝は南東から北西向けのびており、調査区外に及ぶ。柱穴や土坑と重複しており、一部をこれらに切られる。

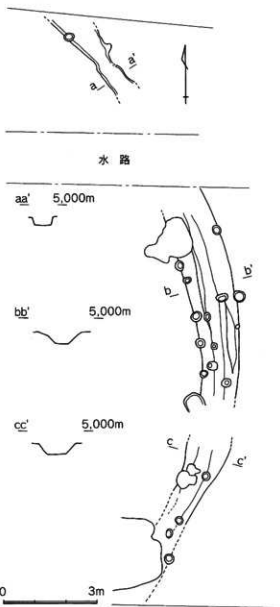
規模 溝の規模は、現存長7.2m、幅0.9~1.1m、深さ0.4mである。底面はほぼ平坦で、壁はやや斜めに立ち上がる。埋土の1層には焼土が混入する。

遺物出土状況 溝内からは、遺物が散発的に出土した。小破片ばかりのため、図示できるものはなかった。

本遺構の時期は不明である。

(5) SD804

位置と検出面 SD804(第232図)は調査区中央付近のE61・E62区にまたがり位置する。



第232図 大友75次SD804

第三面で検出されたもので、一部で土坑や柱穴などから切られる。

また、同位置の第三面からは、井戸(SE113、SE216)や土坑(SK216、SK217)などの大型遺構が確認されている。SD804は、層位的にこれらに先行する。

規模

溝は、幅0.5~1.5mを測るものである。南側は調査区外に及び、E62・E61区にかけては約14mを測る。南側の不明瞭な部分を除き、幅も広く明確に確認される。一旦コンクリート水路により切られた後途絶えるが、ややあって北側の延長上にその痕跡を確認することができる。しかし、調査区中央部に比べると残存状況が悪い。調査区内での総延長は約20mで、緩やかにカーブしている。溝の深さは0.3~0.5mである。本調査区内における溝の検出例は少ないが、いずれも直線的なものであるのに対し、弧状をなす本溝はやや特異である。溝が何かを囲っているとすれば、溝の西側にまると思われる。

溝内からは土器片などが散発的に出土したのみで、時期の決め手になるものはなかった。しかし、層位的な遺構検出状況を考えて、本遺構は、16世紀前半以前に位置づけられる。

6 竪穴建物跡

調査区内で、確実に竪穴建物跡と確認されたのは1基のみで、1基は竪穴が削平されている。

(1) SB628

位置と検出面

SB628(第234図)は調査区中央南寄りのE62・F62区にまたがり位置する。検出されたのは第三面である。

竪穴平面形

竪穴は東西方向に主軸を有するもので、その平面形は隅丸長方形ないしは小判型を呈する。南北の遺構ラインについては、西側が明らかに弧を描き、東側は直線的ではあるがやや弧状をなす。また、東西の遺構ラインについても直線的ではあるが、やや弧状気味である。規模的には、東西が3.4~3.9m、南北が2.8~3.0mを測り、竪穴面積は9.5~11.7㎡である。床面までの深さは、検出面から約0.1mと比較的浅い。遺跡の状況から大きく削平されたことは考えにくいので、本来的に浅いものであったと思われる。床面は平坦である。

柱穴配置

竪穴内からは、多数の柱穴や土坑が確認された。この中には、本竪穴に伴わないものもあると思われる。柱穴配置については、東西の中軸線上に柱1、柱2を、南側長辺に柱3~柱8を、北側長

柱穴掘り方

辺に柱9~柱14を各々配する。長軸線を中心に対称的な位置に柱穴を配する構造である。柱穴は柱2を除き壁際にあり、全てが竪穴の外に向かい斜めに掘り込まれている。すなわち、これらに柱を

入口施設

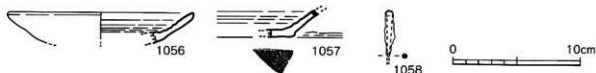
立てた際には、竪穴の内側に柱が傾く感じとなる。床面上にあり唯一直立する柱2との関係を考えて場合、詳細な上屋構造は明確にできないが、東側の面が他の三面とは大きく異なる構造になることが想定でき、入口施設が東側に設置されていたことが考えられる。

竪穴内土坑

このほか竪穴内には、いくつか土坑がみられる。西側の壁に沿う位置には、深さ0.2mの土坑が細長く確認される。また、柱5~柱7の周囲にも、壁にそうように長方形の土坑がみられる。竪穴中央北寄りに位置する円形土坑については、本竪穴に伴うものか不明である。

出土遺物

確実に本竪穴に伴う遺物で、図示できるものはわずかである(第232図)。1056、1057は底部系

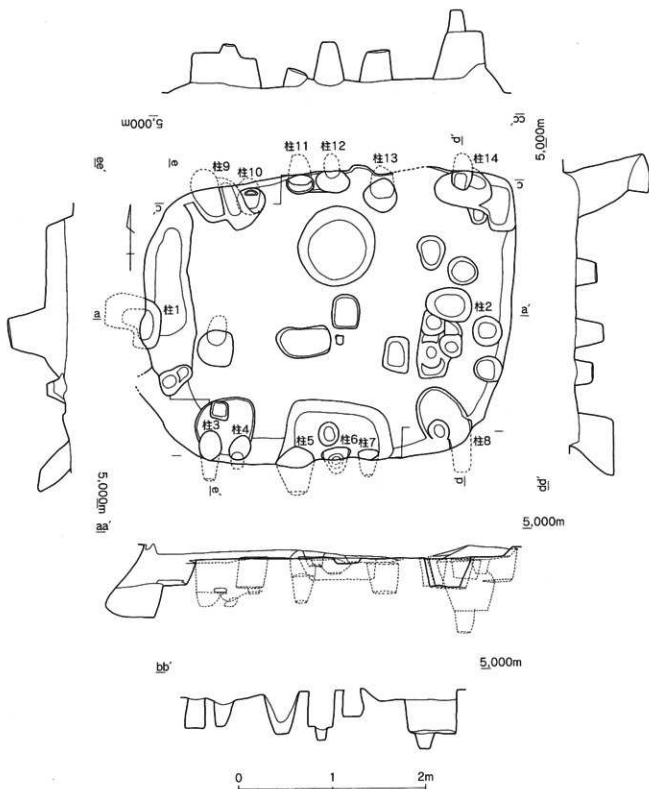


第233図 大友75次SB628出土遺物

体部は斜方向にのびるもので、内面にロクロ痕が残る。16世紀前葉に切りの土師質土器である。体部は斜方向にのびるもので、内面にロクロ痕が残る。16世紀前葉に位置づけられる。1058は鉄製の釘である。

竪穴の時期

本竪穴建物の時期は、出土遺物から16世紀前葉に比定される。



第234図 大友75次SB628

(2) SB825

位置と検出面

SB825 (第235図) は調査区中央北側のE61・F61区に位置するもので、第II面で検出された。

柱穴配置

竪穴自体は削平され残存しておらず、柱穴のみが確認されたものである。柱穴の配置から、東西方向に長軸を有するものと推定される。柱穴は東西2間、南北1間で、柱間間隔は、東西方向が南側2.8m、北側が1.3+1.5m(西から)、南北方向が西側2.4m、東側2.4mを測る。柱穴で囲まれた部分の面積は6.7㎡である。

柱間間隔

柱穴構造

柱穴のうち柱1、柱2、柱4は、明らかに外側に向かい斜めに掘り込まれている。柱3、柱5についても内傾気味である。

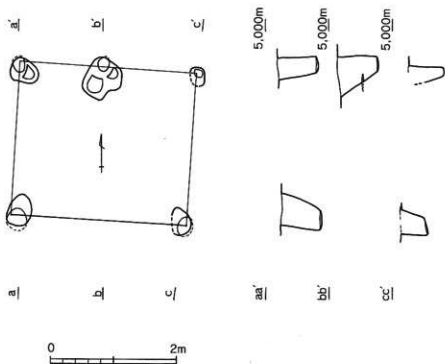
本遺構は、SB628と比べると小規模で、柱穴配置も大きく異なる。しかし、柱穴の状況が類似するため、SB628と同様な竪穴であったと思われる。

竪穴配置

また、SB628との位置関係をみると、SB628の中軸線から北に15mの位置に、長軸方向を同じくして平行して並ぶ。両遺構の配置に企画性がうかがえる。

竪穴の時期

本竪穴の時期は、良好な出土遺物がなく不明であるが、SB628と同様な時期と推測される。



第235図 大友75次SB825

7 掘立柱建物跡

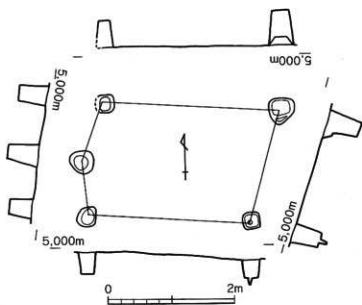
調査区内で確認された掘立柱建物跡は1棟のみであるが、竪穴建物跡の削平されたものである可能性もある。

(1) SB827

SB827 (第236図) は調査区中央やや東寄りのF62区に位置するもので、第III面で検出された。

東西方向に長軸を有するものである。柱穴は東西1間、南北2間で、柱間間隔は、東西方向が南側2.6m、北側が2.8m、南北方向が西側0.9+1.0m、東側1.8mを測る。柱穴で囲まれた部分の面積は約5㎡である。

出土遺物（第237図）は1059の鉄製釘のみである。
 本遺構の時期は、時期が決定できる遺物がなく不明である。



第236図 大友75次SB827



第237図 大友75次SB827
 出土遺物

8 その他の遺構

その他の遺構について、その概要と出土遺物を紹介する。

第2表 大友75次遺構一覧表(2)

遺構番号	日遺構番号	遺構の性格	検出面	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
SK001	S001	攪乱	第Ⅱ面	G61	近現代		165
SK002	S002	攪乱	第Ⅱ面	G61, G62	近現代		165
SK005	S005	攪乱	第Ⅱ面	G63	近現代		165
SK007	S007	攪乱	第Ⅱ面	G63	近現代		165
SP010	S010	柱穴	第Ⅱ面	G61	14世紀前～中		165
SK021	S021	土坑	第Ⅱ面	G62	14世紀前		165
SK026	S026	柱穴	第Ⅱ面	G62	14世紀中～		167
SP034	S034	柱穴	第Ⅱ面	G61	14世紀		167
SK035	S035	不定形土坑	第Ⅱ面	G62	14世紀末		167
SK041	S041	土坑	第Ⅱ面	G62	14世紀前		167
SK056	S056	攪乱	第Ⅰ面	F61	近現代		169
SP061	S061	柱穴	第Ⅱ面	G62	16世紀		169
SP066	S066	柱穴	第Ⅱ面	G63	16世紀中	SK045を切る	169
SK101	S101	攪乱	第Ⅰ面	E62	近現代		169
SP114	S114	柱穴	第Ⅰ面	F61	16世紀		171
SP116	S116	柱穴	第Ⅰ面	F62	16世紀		171
SP118	S118	柱穴	第Ⅰ面	F62	不明		171
SP121	S121	柱穴	第Ⅱ面	G62	16世紀前		171
SK125	S125	土坑	第Ⅱ面	G61	14世紀前半代	SK012に切られる	171
SP126	S126	柱穴	第Ⅰ面	D61	16世紀中		173
SK132	S132	土坑?	第Ⅱ面	C60, 61	16世紀後		173
SP134	S134	柱穴	第Ⅱ面	F61	14世紀		173
SP137	S137	柱穴	第Ⅱ面	F61	14世紀?		173
SK144	S144	土坑	第Ⅱ面	F61	14世紀前半代		176
SP161	S161	柱穴	第Ⅱ面	D61	不明		176
SP162	S162	柱穴	第Ⅱ面	D61	16世紀後半代		176
SP163	S163	柱穴	第Ⅱ面	D61	不明		176
SP165	S165	柱穴	第Ⅱ面	H62	不明		178
SP166	S166	柱穴	第Ⅱ面	E62	14世紀		178
SK181	S181	不定形土坑	第Ⅱ面	F61, G61	16世紀前		178
SK184	S184	土坑	第Ⅱ面	D62	16世紀中		178
SP193	S193	柱穴	第Ⅱ面	F61	16世紀?		178
SP195	S195	柱穴	第Ⅱ面	F61	16世紀?		178
SK203	S203	土坑	第Ⅱ面	E62	16世紀中	SK266上部の集石遺構	178
SK210	S210	土坑	第Ⅱ面	G62	14世紀		180
SK219	S219	土坑?	第Ⅱ面	E61, F61	16世紀前半代		180
SK226	S226	土坑	第Ⅱ面	F60, F61	16世紀後		180
SK227	S227	土坑	第Ⅱ面	F60	16世紀前半代		180
SP230	S230	柱穴	第Ⅱ面	F61	14世紀中		180
SP231	S231	柱穴	第Ⅱ面	F61	16世紀前半代		180
SP232	S232	柱穴	第Ⅱ面	F61	14世紀中		182
SP246	S246	柱穴	第Ⅱ面	D61	16世紀後		182
SK253	S253	土坑	第Ⅱ面	F61	14世紀中		182
SK258	S258	土坑	第Ⅱ面	E62	不明		182
SP267	S267	柱穴	第Ⅱ面	B62	16世紀?		182
SK280	S280	土坑	第Ⅱ面	F61	不明		182
SK309	S309	土坑	第Ⅱ面	F61	14世紀中		182
SK311	S311	土坑	第Ⅱ面	F61, G61, G62	14世紀		184
SP314	S314	柱穴	第Ⅱ面	F62	16世紀後		184
SK316	S316	不定形土坑	第Ⅱ面	F62	16世紀中		184
SK317	S317	土坑	第Ⅱ面	F62, G62	14、15世紀		184
SP324	S324	柱穴	第Ⅱ面	D62	16世紀後		184
SP326	S326	柱穴	第Ⅱ面	D62	16世紀		184
SP327	S327	柱穴	第Ⅱ面	E62	16世紀後		184
SP344	S344	柱穴	第Ⅱ面	D62	16世紀		184
SP363	S363	柱穴	第Ⅱ面	D62	14世紀中		186
SK364	S364	土坑	第Ⅱ面	D61, D62	不明	SK445の上層	186

遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	検出面	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
SP374	S374	柱穴	第Ⅱ面	D61	16世紀		186
SP382	S382	柱穴	第Ⅱ面	E61	不明		186
SP384	S384	柱穴	第Ⅱ面	E61	14世紀		186
SK386	S386	土坑	第Ⅱ面	E61	16世紀?	SK098、SE113、SE186に切られる	186
SK391	S391	土坑	第Ⅱ面	F61	14世紀	SK095に切られる	186
SP394	S394	柱穴	第Ⅱ面	F61	14世紀		186
SK397	S397	不定形土坑	第Ⅱ面	F61	16世紀?		186
SP401	S401	柱穴	第Ⅱ面	F61	14世紀中～後		188
SK406	S406	土坑	第Ⅱ面	E62、F62	16世紀後		188
SK410	S410	土坑	第Ⅲ面	G62	14世紀		188
SP413	S413	土坑	第Ⅱ面	G61	16世紀		188
S415	S415		不明		16世紀後		188
S417	S417		不明		16世紀後～末		188
SK431	S431	柱穴	第Ⅲ面	F62	14世紀		188
SP443	S443	柱穴	第Ⅲ面	F62	不明		188
SK447	S447	土坑?	第Ⅱ面	D61	不明		190
SK456	S456	土坑	第Ⅲ面	G62	14世紀		190
SK463	S463	土坑	第Ⅱ面	G60、G61	16世紀後		190
SK464	S464	土坑	第Ⅱ面	G61	14世紀		190
SP466	S466	土坑	第Ⅱ面	G61	不明		190
SP484	S484	土坑	第Ⅱ面	G61	14世紀		190
SK485	S485	土坑	第Ⅱ面	G62	14世紀前半代		190
SK487	S487	土坑	第Ⅱ面	G62	14世紀中		190
SK490	S490	土坑	第Ⅱ面	G62	14世紀?		192
SK494	S494	土坑	第Ⅱ面	G62	14世紀		192
SK526	S526	不定形土坑	第Ⅱ面	G62	14世紀?		192
SK531	S531	不定形土坑	第Ⅱ面	E62	16世紀前半代		192
SP543	S543	柱穴	第Ⅲ面	F62	不明		192
SP546	S546	柱穴	第Ⅲ面	F61	不明		192
SP549	S549	柱穴	第Ⅲ面	F61	不明		192
SK565	S565	不定形土坑	第Ⅲ面	D62、E62	16世紀前		192
SK569	S569	土坑	第Ⅳ面	D61、E61	14世紀		192
SK588	S588	土坑	第Ⅲ面	D62	16世紀中～後	SK640を切る	192
SP589	S589	柱穴	第Ⅲ面	D62、E62	14世紀		194
SP590	S590	柱穴	第Ⅲ面	D62	15世紀後以降		194
SK604	S604	不定形土坑	第Ⅲ面	C60・61、D60、61	14世紀		194
SK615	S615	土坑	第Ⅲ面	D61	16世紀後		194
SP657	S657	柱穴	第Ⅲ面	E62	14世紀		194
SP664	S664	柱穴	第Ⅲ面	D62、E62	14世紀		194
SP671	S671	柱穴	第Ⅲ面	E62	14世紀		194
SP678	S678	柱穴	第Ⅲ面	D62	不明		194
SK681	S681	土坑	第Ⅲ面	D62	16世紀前半代		196
SK686	S686	不定形土坑	第Ⅱ面	E61	不明		196
SP688	S688	柱穴	第Ⅱ面	E61	不明		196
SP689	S689	柱穴	第Ⅱ面	E61	不明		196
SK692	S692	不定形土坑	第Ⅲ面	C61	16世紀?		196
SP706	S706	柱穴	第Ⅲ面	D62	14世紀?		196
SK738	S738	土坑	第Ⅲ面	D61	14世紀前半代		196
SK745	S745	柱穴	第Ⅲ面	D62	16世紀?		196
SP748	S748	柱穴	第Ⅲ面	D62	14世紀後～		196
SP757	S757	柱穴	第Ⅲ面	E61	14世紀		198
SP758	S758	柱穴	第Ⅲ面	E61	14世紀前		198
SK759	S759	土坑	第Ⅲ面	E61	14世紀		198
SK763	S763	土坑	第Ⅲ面	E62	14世紀中		198
SK775	S775	土坑	第Ⅲ面	C61	14世紀中		198
SP785	S785	柱穴	第Ⅲ面	D61	14世紀		198
SP792	S792	柱穴	第Ⅲ面	D62	16世紀		198
SK803	S803	土坑	第Ⅲ面	E62	不明	SB625内土坑	199
SK811	S811	不定形土坑	第Ⅲ面	D61	14世紀後半代	S601に切られる	199
SP813	S813	柱穴	第Ⅲ面	E62	14世紀		199
SP814	S814	柱穴	第Ⅲ面	E62	16世紀前		200



第238図 大友75次第I面遺構配置図(2)



第240図 大友75次第Ⅲ面遺構配置図(2)

(1) SK001

位置と検出面 SK001(第239図)はG61区に位置するもので、第Ⅱ面から検出された。近現代の攪乱土坑である。
出土遺物 出土遺物(第241図)は、1060の白磁碗底部である。近世以降の所産であろう。

(2) SK002

位置と検出面 SK002(第239図)はG61・G62区にまたがり位置する。第Ⅱ面から検出された南北に細長い土坑で、近現代の攪乱土坑と推測される。

出土遺物 出土遺物(第241図)のうち中世以前のものは、土師質土器がある。
土師質土器環 1061~1064は底部糸切りの環である。1061は復元底径8.2cmの底部で、体部が内湾気味に立ち上がる。1062は復元底径8.0cmを測るもので、底部と同じ厚みの体部が外反気味に立ち上がる。1063も底部資料で、復元底径7.4cmを測る。内湾気味に立ち上がる体部は、底部と同じ厚みである。1064は口縁部で、比較的薄手の体部が内湾気味にのびる。以上は14世紀代に位置づけられる。
大内系 1065は薄手で白色を呈するものである。小破片のため口径の復元はできないが、大内系のものである。15、16世紀に比定されよう。

(3) SK005

位置と検出面 SK005(第239図)はG63区に位置する。第Ⅱ面から検出された不定形土坑で、SK048を切る。本土坑は、近現代の攪乱土坑である。

出土遺物 出土遺物(第241図)のうち、中世以前のものは瓦質土器と中国産時期がある。
瓦質土器壺 1066は瓦質土器壺の口縁端部である。比較的厚手で、端面はナデにより中央が凹み気味である。また、下方にわずかに肥厚が認められる。時間的には15、16世紀代のものか。
青磁碗 1067は中国龍泉窯系青磁碗の体部資料である。外面に錦蓮弁文が施される。13世紀代のもの。

(4) SK007

位置と検出面 SK007(第239図)はG63区に位置する土坑である。第Ⅱ面より検出されたもので、南北に細長い不定形土坑である。SK048を切る近現代の攪乱土坑である。

出土遺物 出土遺物(第241図)には須恵器がある。
東播系 1068、1069とも東播系須恵器こね鉢である。

(5) SP010

位置と検出面 SP010(第239図)は第Ⅱ面で検出された柱穴である。G61区に位置しており、他の柱穴や攪乱土坑と重複する。柱穴の径は0.3~0.4mで、一部を攪乱土坑により切られる。

出土遺物 出土遺物(第241図)には土師質土器がある。
土師質土器環 1070は底部糸切りの環である。口径12.6cm、底径9.6cm、高さ4.6cmを測る。体部は底部と同じ厚みをもち垂直気味に立ち上がる。口縁部は尖り気味である。口径に比し、器高が高いものである。14世紀前葉~中葉に比定できるであろう。
小皿 1071は底部糸切りの小皿である。復元口径8.0cm、底径8.2cm、高さ1.5cmを測る。体部は底部に比べると薄くなっており、やや斜め方向に引き上げられる。時間的には、1070と同様な時期か。
遺構の時期 以上から、SP010は14世紀前葉~中葉に位置づけられる。

(6) SK021

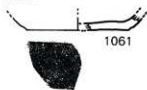
位置と検出面 SK021(第239図)はG62区に位置する土坑である。第Ⅱ面から検出されたもので、全形は不明であ

SK001

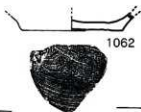


1060

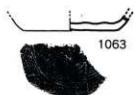
SK002



1061



1062



1063



1064

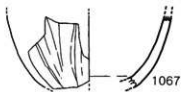


1065

SK005



1066



1067

SK007

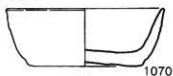


1068

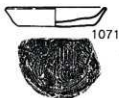


1069

SP010



1070



1071

SK021



1072



1073



第241圖 大友75次SK001,SK002,SK005,SK007,SP010,SK021出土遺物

規模	るが、径0.6m程の円形を呈するものと思われる。
出土遺物	出土遺物（第241図）には土師質土器がみられる。
土師質土器	1072、1073とも底部糸切りの坏である。1072は口縁部資料で、復元口径12.6cmを測る。口縁部はわずかに外反気味である。1073は底部資料で、底径6.8cmを測る。底径が小さく、器高が高いタイプと思われる。14世紀前半代のものか。
遺構の時期	以上の出土遺物から、本遺構の遺棄は14世紀前半代に位置づけられる。

(7) SK026

位置と検出面	SK026（第239図）は第Ⅱ面において検出されたもので、SK039を切る。楕円形を呈するもので、
規模	規模は0.4～0.5mを測る。
出土遺物	出土遺物（第242図）には瓦質土器がある。
鍋	1074は鍋である。直線の女体部から口縁部が短く外方に折れる。口縁部の矮小化が進行したものである。外面には横と縦方向のハケメが、また内面には横方向のハケメが各々施される。口縁部がくの字状に折れる鍋のなかで、最も後出するタイプと思われる。時期を明確にする根拠はないが、14世紀中葉以降のものか。
遺構の時期	出土遺物から、本遺構は14世紀中葉以降に位置づけられる。

(8) SP034

位置と検出面	SP034（第239図）はG61区に位置する柱穴である。第Ⅱ面で検出されたもので、SK17と重複し
規模	ている。柱穴の規模は、径0.2m程である。
出土遺物	出土遺物（第242図）には瓦質土器がある。
瓦質土器	1075は甕の頸部である。肩はあまり張らず、しまった頸部から口縁部が開く。体部外面には、格子目タタキが施される。また、内面にはハケメがみられる。産地は不明であるが、亀山焼須器甕などを模倣した可能性もある。時代的には14世紀代か。
遺構の時期	本遺構は、14世紀代に位置づけられる。

(9) SK035

位置と検出面	SK035（第239図）は不定形土坑で、G62区に位置する。第Ⅱ面で検出されたものであるが、掘乱土坑に切られたり、遺構ラインが不明確な部分が多いため、その全形は不明である。残存する遺構ラインは長さ1mを超える。
出土遺物	出土遺物（第242図）には、土師質土器、瓦質土器、中国産磁器などがある。
土師質土器	1076は底部糸切りの土師質土器小皿である。口径7.75cm、底径6.0cm、高さ1.2cmを測るものである。底部に比べ薄い体部が、底部から低く引き上げられる。14世紀末のものか。
瓦質土器	1077は瓦質土器甕の底部である。体部は底部と同じ厚みである。輪積みのためか、体部のラインがやや屈曲する。外面には格子目タタキが施される。
青磁	1078は中国龍泉窯系青磁碗である。外面に錦蓮弁文がみられる。13世紀代のもの
遺構の時期	以上の出土遺物から、本遺構は14世紀末に位置づけられる。

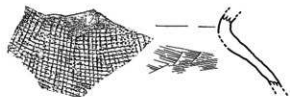
(10) SK041

位置と検出面	SK041（第239図）はG62区に位置する土坑で、第Ⅱ面から検出された。土坑は南北方向に長い楕円形を呈し、長径0.4m、短径0.3mを測る。
出土遺物	出土遺物（第242図）には瓦質土器がある。

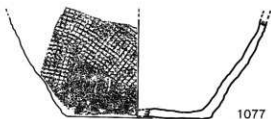
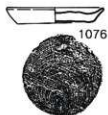
SK026



SP034



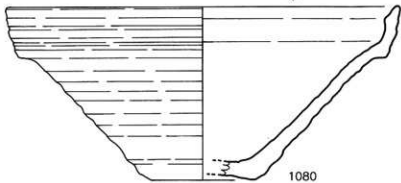
SK035



SK041



SK056



第242图 大友75次SK026,SP034,SK035,SK041,SK056出土遺物

瓦質土器鍋 1079は鍋である。口縁部が短く強く外方に折れる。端部は上方にわずかに肥厚する。内面には横方向のハケメが施される。14世紀前半代のものか。

遺構の時期 本遺構の時期は、出土遺物から14世紀前半代に位置づけられよう。

(11) SK056

位置と検出面 SK056(第238図)はF61区に位置する不定形土坑である。第I面で検出されたもので、本土坑は近現代に位置づけられる攪乱土坑である。

出土遺物 出土遺物(第242図)のうち、中世以前の遺物には焼締陶器備前焼がある。

備前焼摺鉢 1080は備前焼摺鉢である。口縁部外面には凹線がみられ、端部内傾する。摺目は12本単位で、斜交摺目はみられない。乗岡編年の中世6期にあたる。

(12) SP061

位置と検出面 SP061(第239図)はG62区に位置する柱穴である。第II面で検出されたもので、攪乱土坑と重複しており、上部は削平されている。柱穴の規模は、径0.3mである。

出土遺物 出土遺物(第243図)には、天目茶碗がある。

天目碗 1081は瀬戸・美濃系天目茶碗である。16世紀代のもの。

(13) SP066

位置と検出面 SP066(第239図)は第II面で確認された柱穴で、E63区に位置する。柱穴はSK045と重複しており、これを切る。柱穴の規模は、径0.4mである。

出土遺物 出土遺物(第243図)には、京都系土師器がある。

京都系土師器 1082は京都系土師器である。復元口径17.0cmの大型品で、口縁部は短く外反する。底部中央には、焼成後の穿孔がみられる。京都系土師器2期に比定されよう。

本遺構の時期 本遺構の時期は、出土遺物から16世紀中葉に位置づけられる。

(14) SK101

位置と検出面 SK101(第238図)は第I面で確認された土坑で、E62区に位置するものである。本土坑は、近現代の攪乱土坑である。

出土遺物 出土遺物(第43図)のうち、中世以前のもは瓦質土器、焼締陶器がある。

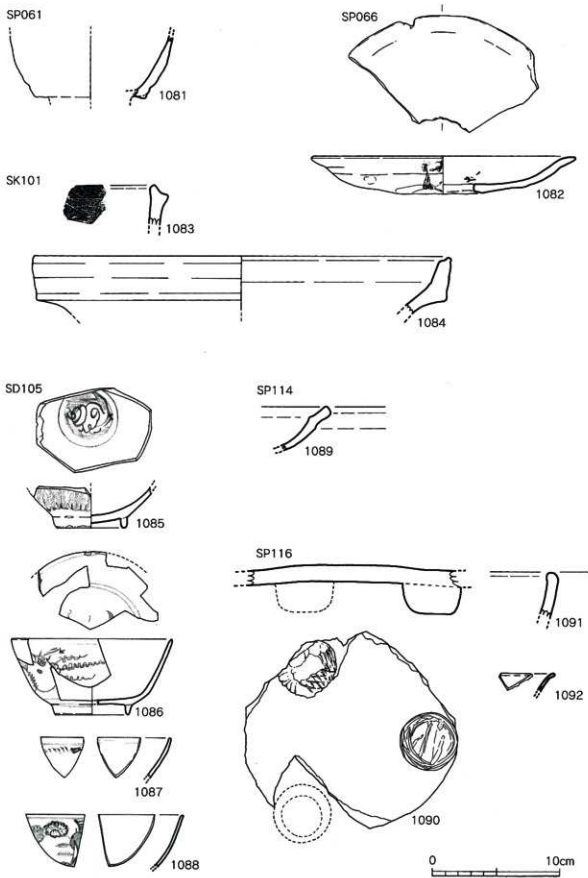
瓦質土器鍋 1083は瓦質土器鍋である。外面に鈎状の突帯が付されるものである。内面にはハケメが施される。外面の突帯が矮小化していること、突帯は口縁端部ちかくまで上がってきていることから、このタイプの鍋の最も新しい形態であろう。14世紀前葉以降のものか。

備前焼摺鉢 1084は焼締陶器備前焼摺鉢である。口縁端部はわずかに内傾する。乗岡編年の中世6期にあたる。以上から、本遺構の時期は16世紀初～前葉に位置づけられよう。

(15) SD105

出土遺物 SD105については前述した(145頁)ので、出土遺物(第243図)の中国産青花について紹介する。

青花 1085は景德鎮窯系青花碗で、蓮子碗タイプである。外面に芭蕉葉文、見込み部に法螺貝が描かれる。小野分類の碗C群に相当する。1086は景德鎮窯系青花碗で、見込みを平坦に広くとするもので、小野分類の碗D群にあたる。1087は漳州窯系青花碗である。1088は景德鎮窯系青花碗である。1088は景德鎮窯系青花碗で、小野分類の碗E群に相当する。



第243圖 大友75次SP061,SP066,SK101,SD105,SP114,SP116出土遺物

(16) SP114

- 位置と検出面 SP114 (第238図) はF61区に位置する柱穴で、第I面から検出された。柱穴の規模は、径0.4mである。
- 出土遺物 出土遺物 (第243図) には瓦質土器がある。
- 銅 1089は銅と思われる。丸底のボウル状の体部を有するもので、口縁部周辺には強いナデが施され、外方に傾く。16世紀代のものである。
- 遺構の時期 本柱穴は16世紀代に位置づけられる。

(17) SP116

- 位置と検出面 SP116 (第238図) はF62区に位置する柱穴で、第I面から検出された。柱穴の規模は、径0.2mである。
- 規模
- 出土遺物 出土遺物 (第243図) には瓦質土器、中国産磁器がある。
- 瓦質土器 1090は瓦質土器火鉢底部である。径5cm程の丸い脚が3ヶ所に貼り付けられる。16世紀代のものであろう。1091は鉢の口縁部である。
- 白磁 1092は白磁皿である。16世紀前半代のものである。
- 遺構の時期 以上から、本遺構の時期は16世紀代に位置づけられる。

(18) SP118

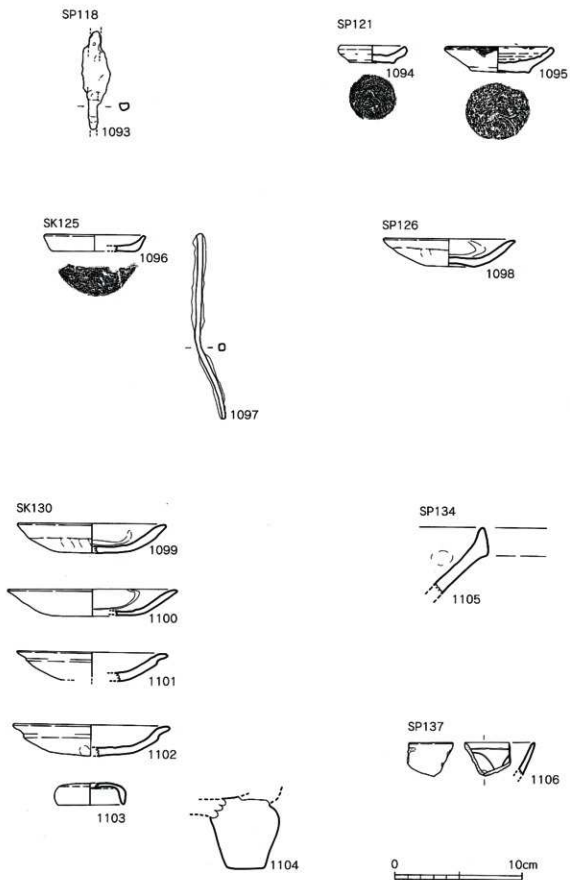
- 位置と検出面 SP118 (第238図) は、第I面のF62区から検出された柱穴である。柱穴の規模は、径0.2mである。
- 規模
- 出土遺物 出土遺物 (第244図) は、1093の鉄製釘のみである。釘は断面方形を呈するものである。時期は不明である。

(19) SP121

- 位置と検出面 SP121 (第239図) は、G62区に位置する柱穴である。第II面で検出されたもので、柱穴の規模は径0.2mである。柱穴からは完形の土師質土器が2個個体出土している。地鎮等に係わる埋納である可能性が高い。
- 遺構の性格
- 出土遺物 出土遺物 (第244図) は土師質土器である。
- 土師質土器 1094は底部糸切りの土師質土器で、口径5.5cmの小型品である。体部は斜方向に引き上げられ、端部は丸くおさまられる。1095も底部糸切りの土師質土器で、口径8.3~8.6cmを測る。体部は斜方向に直線的にび口縁部にいたる。口縁端部は丸くおさまられる。体部内面にはロクロ痕がみられる。また、口縁部にはスス状付着物の付着が認められ、灯火器として使用されたことが分かる。
- 遺構の時期 以上は、16世紀前葉に比定されることから、本遺構もこの時期に位置づけられよう。

(20) SK125

- 位置と検出面 SK125 (第239図) はG61区に位置する土坑である。第II面で検出されたもので、遺構の大半をSK102や覆乱土坑に切られる。そのため、遺構の平面形や規模は不明である。
- 出土遺物 出土遺物 (第244図) には、土師質土器、鉄製品がある。
- 土師質土器 1090は土師質土器小皿である。底部糸切りで、復元口径8.0cmを測る。体部は底部と同じ厚さで立ち上がり、端部はやや尖り気味である。14世紀前半代のものである。
- 鉄製品 1097は鉄製の釘と思われる。
- 遺構の時期 以上から、本遺構の時期は14世紀前半代に位置づけられよう。



第244図 大友75次SP118,SP121,SK125,SP126,SK130,SP134,SP137出土遺物

(21) SP126

- 位置と検出面 SP126 (第138図) は第Ⅰ面のD61区で検出された柱穴である。柱穴は、水路により一部が切られ
規模 るが、径0.3mの規模をもつものである。
出土遺物 出土遺物 (第244図) には、京都系土師器がある。
1098は口径10.4cmを測るものである。口縁部がわずかに外反する。京都系土師器2期に比定さ
遺構の時期 れる。柱穴は16世紀中葉に位置づけられよう。

(22) SK130

- SK130の遺構、出土遺物の詳細については、すでに説明したとおりである (41頁)。ここでは先
の報告にもれた遺物を紹介する。
京都系土師器 1099~1102は京都系土師器である。1100は比較的薄手で、京都系土師器1期に比定される。他は
やや厚手で、1101、1102は口縁が短く外反する。
1103は焼塩壺の蓋。
1104は瓦質土器火鉢の脚である。

(23) SP134

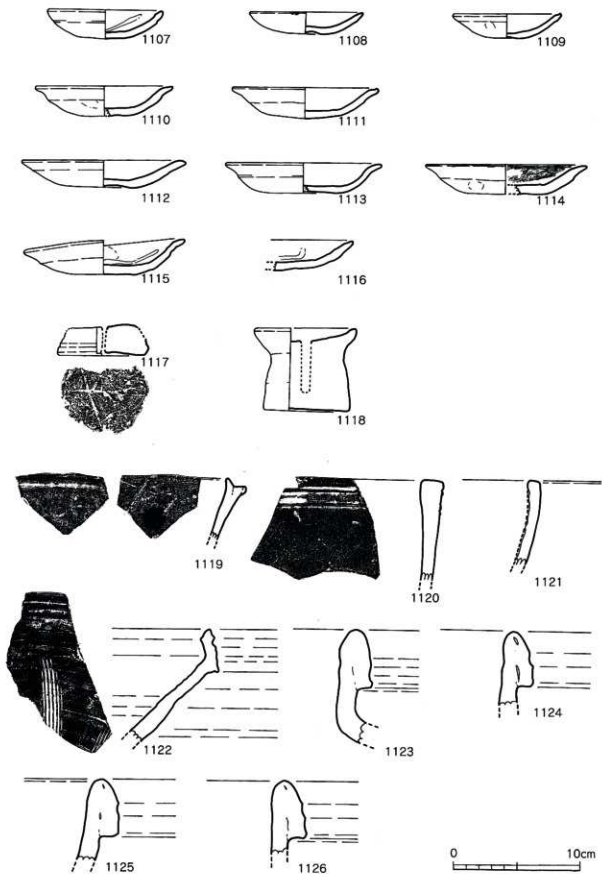
- 位置と検出面 SP134 (第239図) は第Ⅱ面のF61区で検出された柱穴で、径0.35mを測る。
出土遺物 出土遺物 (第244図) のうち、1105は東播系須恵器こね鉢である。

(24) SP137

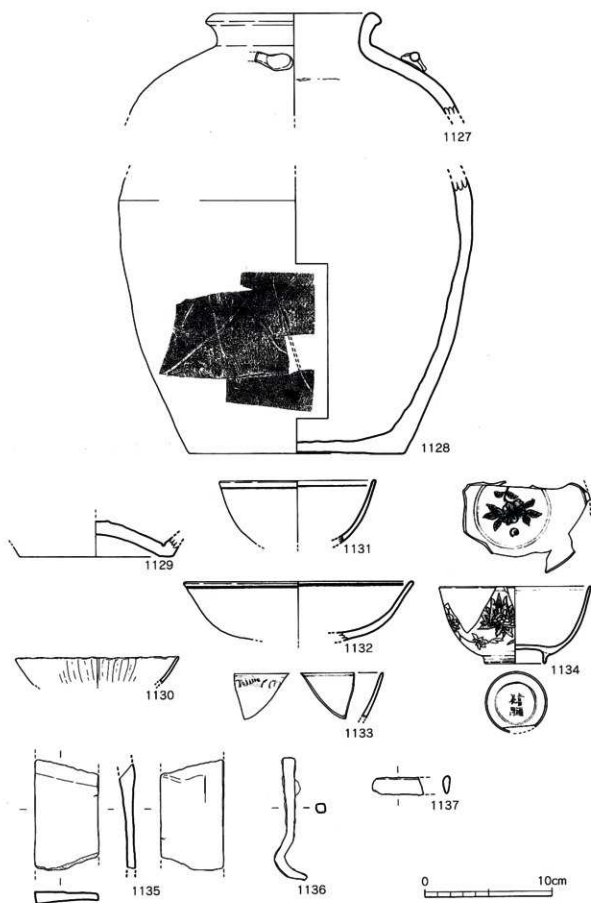
- 位置と検出面 SP137 (第239図) は第Ⅱ面のF61区で検出された柱穴である。
出土遺物 出土遺物 (第244図) のうち、1106は龍泉窯系青磁碗で、内面に文様がある。12世紀代のもの。

(25) SK132

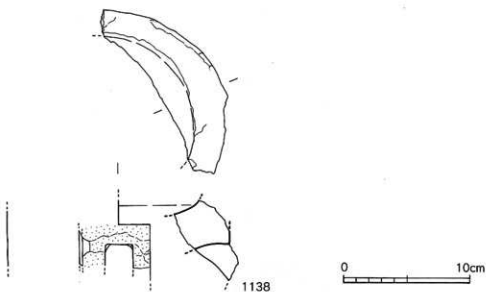
- 位置と調査区 SK132 (第239図) は第Ⅱ面で確認されたもので、調査区北西隅のC60・C61区にかけて位置する。
長さ5m以上に及ぶ不定形土坑であるが、包含層の可能性もある。
出土遺物 出土遺物 (第245~第247図) には、京都系土師器、瓦質土器、焼締陶器、中国産磁器等がある。
京都系土師器 1107~1116は京都系土師器である。口径9cm程のもの (1107~1109)、口径11cm程のもの (1110
~1111)、口径13cm程のもの (1112~1115) がみられる。これらは京都系土師器2期に相当する。
燵台 1117、1118は土師質土器燵台である。1117は口縁部を欠くが、中央に孔がみられる。1118は1117
に比べ台が高いものである。やはり中央に孔がみられるが、底部までは達しない。
瓦質土器 1119~1121は瓦質土器である。1119は鏝の退化した鍋で、14世紀代のもの。1120は火鉢で、16世
紀後は以前のもの。1121は鉢で、16世紀代のものか。
備前焼 1122~1128は焼締陶器備前焼である。1122は播鉢で、乗岡編年の中世6期のもの。1123~1126は
甕で、中世6期のもの。1127と1128は甕で同一個体と思われる。中世6期のものか。
1129は焼締陶器の底部で、東南アジア産か。
中国産磁器 1130~1134は中国産磁器である。1130は型押し of 青磁菊花皿で、16世紀代のもの。1131、1132は
口縁部内外面に1条ずつ界線がみられる青花碗で、漳州窯系。1133は景德鎮窯系青花碗C群、1134
は底部鐘頭心タイプの景德鎮窯系青花碗E群である。
金属製品 1136、1137は金属製品である。1136は鉄製の釘である。1137は銅製品で器種は不明。
石製品 1135、1138は石製品である。1135は砥石である。板状に剥離し薄くなっている。1138は茶臼の上
白である。破片資料であるが、挽手穴の周囲に方形の裝飾がみられる。



第245図 大友75次SK132出土遺物(1)



第246圖 大友75次SK132出土遺物(2)



第247図 大友75次SK132出土遺物(3)

(26) SK144

位置と検出面 SK144 (第239図) は第Ⅱ面のF61区で検出された土坑である。土坑は全形が不明であるが、現存長で東西0.6mを測る。

土師質土器環 出土遺物 (第248図) のうち、1139は底部糸切りの土師質土器環である。復元口径12.0cmを測るもので、体部は底部と同じ厚さでわずかに内湾気味である。14世紀前半代のものであろう。

遺構の時期 出土遺物から本土坑は、14世紀前半代に位置づけられる。

(27) SP161

位置と検出面 SP161 (第239図) は第Ⅱ面のD61区で検出された柱穴である。柱穴はSK130により一部が切られているが、径0.3mを測る。

出土遺物 出土遺物 (第248図) のうち、1140は取手部分である。

(28) SP162

位置と検出面 SP162 (第239図) は第Ⅱ面のD61区で検出された柱穴である。SP161に隣接しており、径0.35mを測る。

青花 出土遺物 (第248図) のうち、1141、1142はともに中国景德鎮窯系青花である。1141は碗で、小野分類の碗E群に相当する。1142は皿で、皿E群にあたる。

遺構の時期 以上から、本遺構の時期は16世紀後半代に位置づけられる。

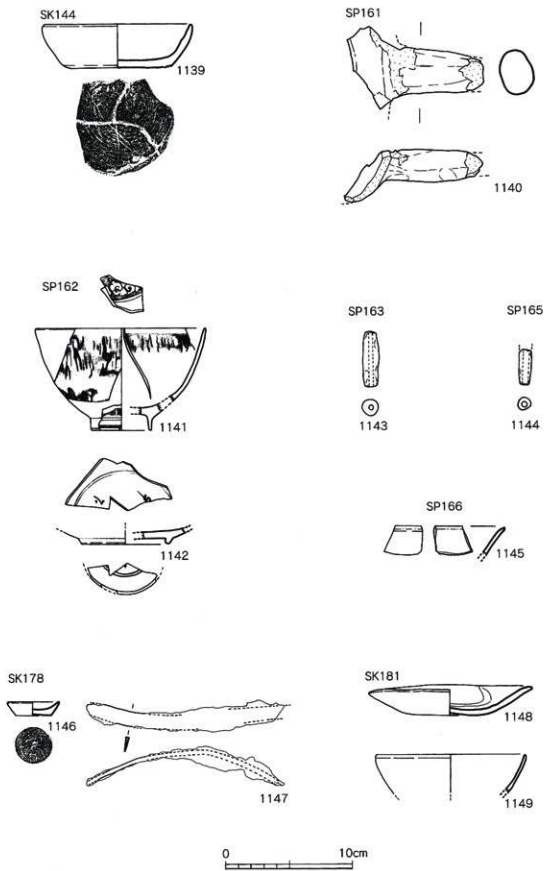
(29) SP163

位置と検出面 SP163 (第239図) は第Ⅱ面のD61区で検出された柱穴である。柱穴の径は、0.35mである。

出土遺物 出土遺物 (第248図) のうち、1143は土錘である。

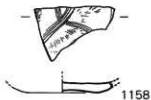
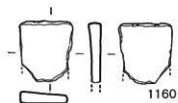
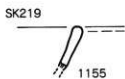
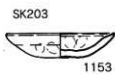
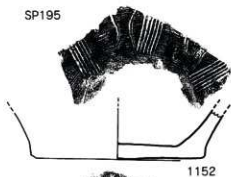
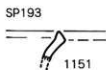
(30) SP165

位置と検出面 SP165 (第239図) は第Ⅱ面のE62区に位置する柱穴である。柱穴はSK265を切っており、径0.2~0.35mを測る。



第248图 大友75次SK144,SP161,SP162,SP163,SP165,SP166,SK178,SK181出土遺物

- 出土遺物 出土遺物（第248図）のうち、1144は土鏝である。
- (31) SP166
- 位置と検出面 SP166（第239図）は第Ⅱ面のE62区に位置する柱穴である。柱穴の規模は、径0.2mを測る。
口莖皿 出土遺物（第248図）のうち、1145は中国産の白磁口莖皿である。14世紀代に使用されたものであろう。
- (32) SK178
- 第2節3（27）参照
- (33) SK181
- 位置と検出面 SK181（第239図）は第Ⅱ面のF61・G61区にかけて位置する不定形土坑である。土坑は大型の土坑であるSK012の南側に隣接しているが、水路に切られ全形は不明である。現存長で東西2.0mを測る。
京都系土師器 出土遺物（第248図）のうち、1148は京都系土師器である。比較的薄手で、京都系土師器1期に比定されよう。1149は白磁碗である。
- (34) SK184
- 位置と検出面 SK184（第239図）は第Ⅱ面のD62区に位置する土坑である。土坑は円形を呈するもので、その規模は径0.8mである。
京都系土師器 出土遺物（第249図）のうち、1150は京都系土師器である。口径8.8cmを測るもので、外面口縁下にわずかな段がつく。口縁部にはスス状付着物がみられ、灯火器として使用されたことが分かる。京都系土師器2期に相当する。
遺構の時期 本遺構の時期は、16世紀中葉に位置づけられる。
- (35) SP193
- 位置と検出面 SP193（第239図）はF61区に位置する柱穴である。第Ⅱ面から検出されたもので、径0.4mを測る。
瓦質土器鍋 出土遺物（第249図）のうち、1151は瓦質土器鍋の口縁部と思われる。防長系のものか。
- (36) SP195
- 位置と検出面 SP195（第239図）はF61区に位置する柱穴である。第Ⅱ面から検出されたもので、径0.4mを測る。
須恵器播鉢 出土遺物（第249図）のうち、1152は須恵器播鉢の底部である。内面には横方向のハケメが施された後に、6本単位の摺り目がいれられる。
- (37) SK203
- 位置と検出面 SK203（第239図）は第Ⅱ面のE62区に位置する。SK266の上層に展開する集石で、南北1.8m、東西0.7mの範囲でみられる。
出土遺物 出土遺物（第249図）には、1159の京都系土師器がある。口径8.7cmを測るもので、京都系土師器2期に相当するものである。
遺構の時期 以上から、本遺構は16世紀中葉に位置づけられる。



第249図 大友75次SK184,SP193,SP195,SK203,SK210,SK219出土遺物

(38) SK210

位置と検出面	SK210 (第239図) は第Ⅱ面のG62区で検出された土坑である。土坑はSK178に切られているため、
規模	全形は不明である。円形基調を呈するものと思われ、その規模は推定径0.1m程と思われる。
瓦質土器鍋	出土遺物 (第249図) のうち、1154は瓦質土器鍋である。口縁部が短く外方に折れ、端部が上方に引き上げられる。14世紀代のものである。

(39) SK219

位置と検出面	SK219 (第239図) は第Ⅱ面のE61・F61区にかけて検出された土坑である。土坑は東西方向に長軸をもつもので、長さが現存長2.2m、幅0.8mを測る。SK213を切る。
出土遺物	出土遺物 (第249図) には、瓦質土器、中国産磁器、石製品、金属製品がある。
瓦質土器	1155、1156は瓦質土器鉢である。
中国産磁器	1157~1159は中国産磁器である。1157は龍泉窯系青磁碗で、鎊蓮弁文がみられる。13世紀代のもの。1158は同安窯系青磁皿で、12世紀代のもの。1159は白磁皿である。16世紀前半か。1160は砥石。1161は鉄製の釘である。

(40) SK226

位置と検出面	SK226 (第239図) は第Ⅱ面のF60・F61区にかけて検出された土坑である。土坑は楕円形を呈し、
規模	その規模は1.0×1.2mである。
出土遺物	出土遺物 (第250図) には、青花、石製品、鉄製品がある。
青花	1162は漳州窯系青花碗である。外面に文様がみられるが、内面には界線や文様はない。16世紀後葉以降のもの。1163は砥石である。1164は鉄製の釘である。
遺構の時期	以上の出土遺物から、本土坑の時期は16世紀後葉以降に位置づけられる。

(41) SK227

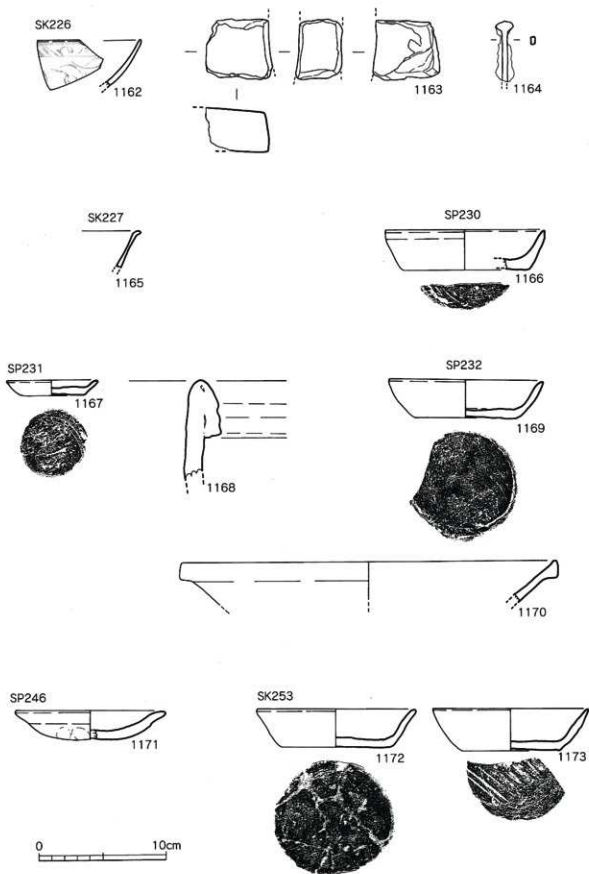
位置と検出面	SK227 (第239図) は第Ⅱ面のF60区に位置する土坑である。全体は確認されていないが、円形基調を呈するものと思われる。その規模は径0.4mを測る。
白磁	出土遺物 (第250図) には、1165の中国産白磁皿がある。16世紀前半代のもの。

(42) SP230

位置と検出面	SP230 (第239図) は第Ⅱ面のF61区に位置する柱穴である。径0.25mであるが、他の柱穴より
規模	切られている。
土師質土器环	出土遺物 (第250図) には、1166の土師質土器环がある。底部糸切りで、底部と同じ厚みの体部が直立気味に立ち上がる。復元口径は12.6cmで、端部は尖り気味である。14世紀中葉前後か。

(43) SP231

位置と検出面	SP231 (第239図) は第Ⅱ面のF61区に位置する柱穴である。径0.4mを測る。
出土遺物	出土遺物 (第250図) には、土師質土器、焼締陶器がある。
土師質土器	1167は土師質土器小皿である。底部糸切りで、口径7.2cmを測る。底部に比べ薄い体部が斜方向に引き上げられる。
備前焼	1168は焼締陶器備前焼の甕である。乗岡編年の中世6期に相当する。



第250図 大友75次SK226,SK227,SP230,SP231,SP232,SP246,SK253出土遺物

(44) SP232

位置と検出面 SP232 (第239図) はF61区に位置する柱穴である。第Ⅱ面で検出されたもので、径は0.3m。
出土遺物 出土遺物 (第250図) のうち、1169は底部糸切りの土師質土器環である。復元口径12.3cmを測るもので、端部は尖り気味である。14世紀中葉前後のものか。1170は東播系須恵器こね鉢である。

(45) SP246

位置と検出面 SP246 (第239図) は第Ⅱ面のD61区で検出された柱穴である。本柱穴はSP368を切っており、径規模 0.3~0.5mである。
京都系土師器 出土遺物 (第250図) には、1171の京都系土師器がある。京都系土師器2期に相当する。

(46) SK253

位置と検出面 SK253 (第239図) はF61区に位置する土坑である。第Ⅱ面で検出されたもので、SK095に切られる。土坑の規模は、径0.5mである。
土師質土器環 出土遺物 (第250図) は底部糸切りの土師質土器環である。1172は復元口径12.6cmで、底部と同じ厚みの体部がわずかに外反気味に口縁にいたる。1173も底部と同じ厚さの体部で、体部中程がやや厚く口縁は尖り気味である。復元口径12.3cm。以上は14世紀中葉前後に比定される。

(47) SK258

位置と検出面 SK258 (第239図) は第Ⅱ面のE62区に位置する土坑である。土坑は柱穴などに切られているが、規模 楕円形基調を呈する。規模は、長さ0.5m、幅0.3mである。
出土遺物 出土遺物 (第251図) は、1174の瓦質土器鉢である。

(48) SP267

位置と検出面 SP267 (第239図) は第Ⅱ面のE62区に位置する柱穴である。
焼締陶器鉢 出土遺物 (第251図) には、1175の焼締陶器鉢がある。口縁部は外側に折り返し、口縁帯としている。中国産か。

(49) SK280

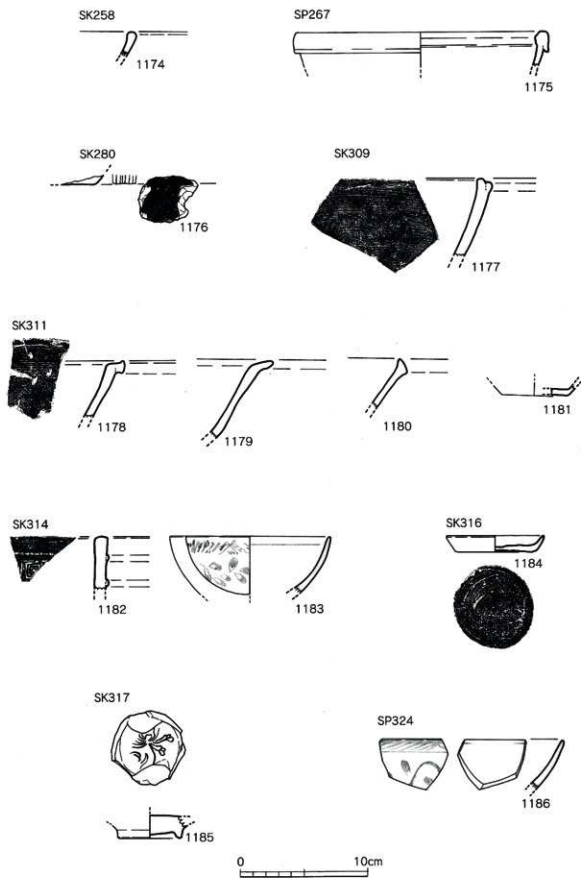
位置と調査区 SK280 (第239図) はF61区に位置する土坑である。第Ⅱ面で検出されたものであるが、柱穴などに切られている。平面形は東西方向に長軸をもつ長方形で、長さ1.0m、幅0.7mを測る。
滑石製鍋 出土遺物 (第251図) には、1176の滑石製鍋がある。底部資料であるが、全形は不明である。

(50) SK309

位置と調査区 SK309 (第239図) はF61区に位置する土坑である。第Ⅱ面で検出されたものであるが、SK012に切られたり、水路の壊されたりしており全形は不明である。東西方向の現存長は1.0mである。
規模 出土遺物 (第251図) のうち、1177は瓦質土器鍋である。外面に鈔が付されるタイプであるが、鈔が退化して、口縁外側が肥厚するように付される。14世紀中葉以降か。
瓦質土器鍋
遺構の時期 以上の遺物から、本土坑は14世紀中葉以降に位置づけられる。

(51) SK311

位置と検出面 SK311 (第239図) は第Ⅱ面で検出されたもので、F61・F62・G61・G62区にかけてみられる。他の遺構と重複して全容は不明であるが、長さ5m程にわたり段落が確認される。
規模



第251圖 大友75次SK258,SO267,SK280,SK309,SK311,SP314,SK316,SK317,SP324出土遺物

出土遺物 出土遺物(第251図)のうち、1178、1179は瓦質土器鍋である。1178は口縁部が短く外方に折れる。1179は口縁部が外反ものである。両者は14世紀前半代のものか。1180は東播系須恵器こね鉢。1181は中国産白磁口売皿の底部である。

遺構の時期 以上の出土遺物から、本土坑は14世紀代に位置づけられる。

(52) SP314

位置と検出面 SP314(第239図)はF62区に位置する柱穴で、第Ⅱ面で検出された。規模は径0.3mである。

出土遺物 出土遺物(第251図)のうち、1182は瓦質土器火鉢である。16世紀代にもの。1183は〇州窯系青花碗である。16世紀後葉以降に比定される。

(53) SK316

位置と検出面 SK316(第239図)は第Ⅱ面のF62区に位置する不定形土坑である。土坑はSK290やSK302などに規模 切られ全形は不明であるが、現存長で、南北4.5m、東西4.0mを測る。

土師質土器 出土遺物(第251図)のうち、1184は底部糸切りの土師質土器小皿である。底部と同じ厚みの体部が立ち上がる。16世紀中葉前後のものか。

(54) SK317

位置と検出面 SK317(第239図)はF62・G62区にまたがり位置する不定形土坑である。第Ⅱ面で検出されたものであるが、他遺構と重複したり、遺構ラインが不明確な部分もあり、全形は必ずしも明確ではない。その規模は、現存長で、南北2.3m、東西2.3mである。

出土遺物 出土遺物(第251図)のうち、1185は中国産青磁碗の底部である。14、15世紀のものか。

(55) SP324

位置と検出面 SP324(第239図)は第Ⅱ面のD62区に位置する柱穴で、その規模は0.3mである。

出土遺物 出土遺物(第251図)のうち、1186は漳州窯系青花碗である。

(56) SP326

位置と検出面 SP326(第239図)はD62区に位置する柱穴で、第Ⅱ面から検出された。

角徳利 出土遺物(第252図)のうち、1187は朝鮮王朝産焼締陶器角徳利である。

(57) SP327

位置と検出面 SP327(第239図)はE62区に位置する柱穴で、第Ⅱ面から検出された。

出土遺物 出土遺物(第252図)のうち、1188は漳州窯系青花碗である。

(58) SP344

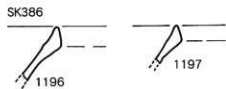
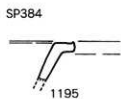
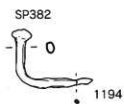
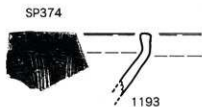
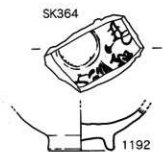
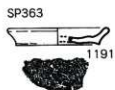
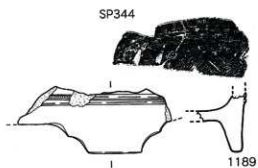
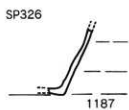
位置と検出面 SP344(第239図)はD62区に位置する柱穴で、第Ⅱ面から検出された。

出土遺物 出土遺物(第252図)のうち、1189は瓦質土器火鉢で、板状の脚が貼り付けられる。1190は鉄製の釘である。

(59) SP363

位置と検出面 SP363(第239図)はD62区の第Ⅱ面で検出された柱穴である。

出土遺物 出土遺物(第252図)のうち、1191は土師質土器小皿である。復元口径7.6cmを測るもので、底



第252圖 大友75次SP326,SP327,SP344,SP363,SK364,SP374,SP382,SP384,SK386出土遺物

部と同じ厚みの体部が外反気味に立ち上がる。14世紀中葉前後のものか。

(60) SK364

位置と検出面 SK364 (第239図) はD61・D62区にまたがり位置する土坑である。第Ⅱ面で検出されたものであ
規模 るが、西半は調査区外に及ぶ。南北の現存長は3.6mである。
出土遺物 出土遺物 (第252図) のうち、中国産青磁碗底部である。

(61) SP374

位置と検出面 SP374 (第239図) はD61区の第Ⅱ面で検出された柱穴で、径0.35mである。
出土遺物 出土遺物 (第252図) のうち、1193は瓦質土器播鉢である。16世紀代の所産である。

(62) SP382

位置と検出面 SP382 (第239図) はE61区の第Ⅱ面で検出された柱穴である。
出土遺物 出土遺物 (第252図) のうち、1194は鉄製の釘である。

(63) SP384

位置と検出面 SP384 (第239図) はE61区の第Ⅱ面で検出された柱穴である。柱穴は北半が調査区外に及び全形
規模 は不明である、規模は径0.3mである。
出土遺物 出土遺物 (第252図) のうち、1195は瓦質土器鍋で、口縁部が外方に折れる。14世紀代のもの。

(64) SK386

位置と検出面 SK386 (第239図) はE61区の第Ⅱ面で検出された土坑である。SE186やSK098などに切られると
ともに、水路のより破壊されているため全形は不明である。
焼締陶器 出土遺物 (第252図) のうち、1196と1197は東播系須恵器こね鉢である。1198は焼締陶器鉢産
中国産 である。薄手の小型品で、中国産と思われる。1199は土鍾である。

(65) SK391

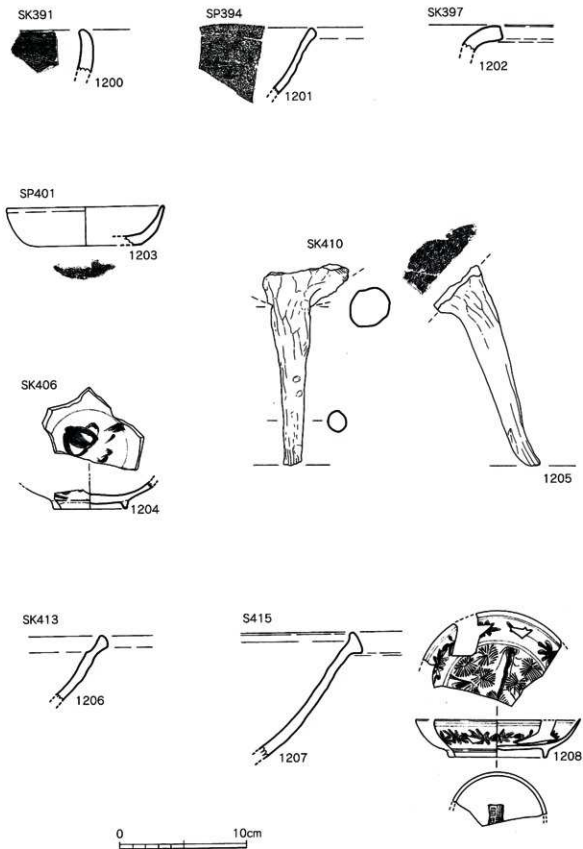
位置と検出面 SK391 (第239図) はF61区の第Ⅱ面で検出された土坑である。SK095に大半が切られており全形
は不明である。
出土遺物 出土遺物 (第253図) のうち、1200は瓦質土器鉢である。14世紀代のものか。

(66) SP394

位置と検出面 SP394 (第239図) はF61区に位置する柱穴である。第Ⅱ面で検出されたもので、他の柱穴に切ら
規模 れるが、径0.4mを測る。
出土遺物 出土遺物 (第253図) のうち、1201は瓦質土器鍋である。14世紀代のものか。

(67) SK397

位置と検出面 SK397 (第239図) は第Ⅱ面で検出された土坑で、F61区に位置する。その規模は0.6×0.4mであ
規模 る。
出土遺物 出土遺物 (第253図) のうち、1202は瓦質土器甕である。



第253图 大友75次SK391,SP394,SK397,SP401,SK406,SK410,SK413,S415出土遺物

(68) SP401

位置と検出面 SP401 (第239図) は第Ⅱ面のF61区で検出された柱穴である。本柱穴は、近世まで降るSK012を切っていることから、近世以降に位置づけられるものと思われる。

土師質土器坏 出土遺物 (第253図) のうち、1203は土師質土器坏である。底部糸切りで、復元口径12.6cmを測る。14世紀中葉～後葉に比定される。

(69) SK406

位置と検出面 SK406 (第239図) は第Ⅱ面のE62・F62区にまたがり位置する土坑である。土坑は円形基調を呈し、径0.55～0.7mを測る。

青花 出土遺物 (第253図) のうち、1204は中国漳州窯系青花碗である。16世紀後葉以降のものか。以上の出土遺物から、本遺構は16世紀後葉以降に位置づけられる。

(70) SK410

位置と検出面 SK410 (第240図) は第Ⅲ面のG62区で検出された土坑である。土坑は円形基調を呈し、径0.4～0.5mを測る。

瓦質土器鍋 出土遺物 (第253図) のうち、1205は瓦質土器鍋の脚である。体部にはハケメが残る。14世紀代のものであろう。

(71) SP413

位置と検出面 SP413 (第239図) はG61区に位置するものである。攪乱などのため残存状況は悪く、西半分が残存するのみである。柱穴の規模は、径0.2mである。

瓦質土器鍋 出土遺物 (第253図) のうち、1206は瓦質土器鍋である。16世紀代に比定される。

(72) S415

瓦質土器鍋 S415からの出土遺物 (第253図) のうち、1207は瓦質土器鍋である。1208は中国景德鎮窯系青花皿である。これは、小野分類の皿E群に相当する。

(73) S417

火鉢 S417からの出土遺物 (第254図) のうち、1209は瓦質土器火鉢で、2条の突帯の間に双頭獣手流雲文のスタンプが施される。1210は中国漳州窯系青花碗である。

(74) SK431

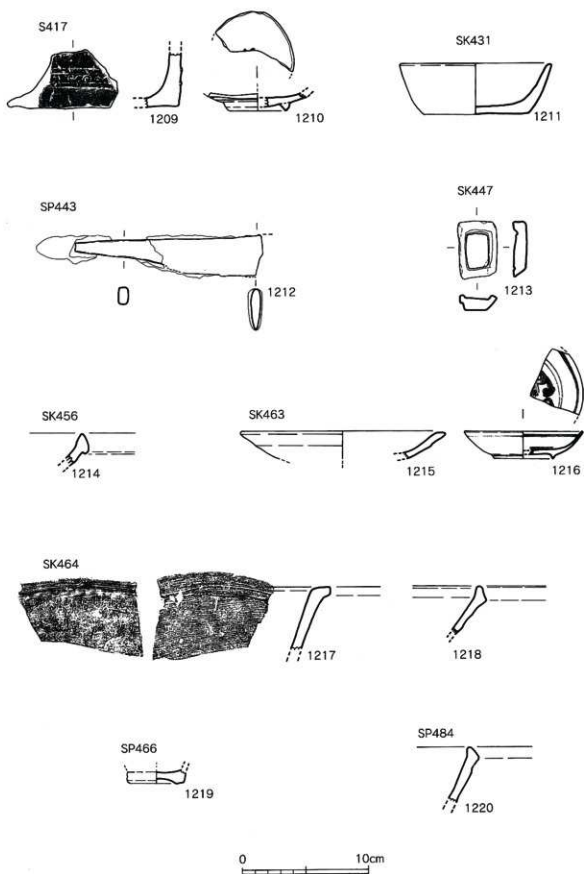
位置と検出面 SK431 (第240図) は第Ⅲ面のF62区から検出された土坑である。土坑は東西に長い楕円形を呈し、その規模は、東西0.6m、南北0.4mである。

土師質土器坏 出土遺物 (第254図) のうち、1211は土師質土器坏である。14世紀代に比定される。

(75) SP443

位置と検出面 SP443 (第240図) は第Ⅲ面のF62区から検出された柱穴である。柱穴は径0.4mを測る。

刀 出土遺物 (第254図) のうち、1212は鉄製の刀である。先端部が失われているが、現存長で18.0cmを測る。基部は比較的厚く、目釘穴は確認できない。



第254図 大友75次S417,SK431,SP443,SK447,SK456,SK463,SK464,SP466,SP484出土遺物

(76) SK447

位置と検出面 SK447（第239図）は第Ⅱ面のD61区で検出された土坑である。
規模 出土遺物（第254図）には1213の硯がある。長さ4.5cm、幅3.0cm、厚1.0cmの小型品である。

(77) SK456

位置と検出面 SK456（第240図）は第Ⅲ面で検出された土坑で、G62区に位置する。東半分が不明であるが円形
規模 基調を呈する。南北方向の現存長は、0.85mである。
東播系 出土遺物（第254図）のうち、1214は東播系須恵器こね鉢である。

(78) SK463

位置と検出面 SK463（第239図）は第Ⅱ面のG60・G61区にまたがり位置し、北側は調査区外に及ぶ。
京都系土師器 出土遺物（第254図）のうち、1215は京都系土師器である。復元口径16.2cmを測るもので、京都
青花 系土師器2期に相当する。1216は中国景德鎮窯系青花皿で、小野分類の皿E群に相当する。
遺構の時期 以上から、本遺構の時期は16世紀後葉に位置づけられる。

(79) SK464

位置と検出面 SK464（第239図）は第Ⅱ面のG61区に位置する東西に長い土坑である。土坑は残存状況が悪く、
規模 東側が調査区外に及ぶため全形は不明である。南北の幅は0.6mである。
出土遺物 出土遺物（第254図）のうち、1217は瓦質土器鍋で、口縁部が短くL字状に折れる。外面にはハ
ケメのちナデ、内面は横方向のハケメがみられる。1218は東播系須恵器こね鉢である。
遺構の時期 以上から、本遺構は14世紀代に位置づけられる。

(80) SP466

位置と検出面 SP466（第239図）は第Ⅱ面のG61区に位置する柱穴で、その規模は径0.2～0.3mを測る。
出土遺物 出土遺物（第254図）のうち、1219は瀬戸美濃系天目茶碗底部である。

(81) SP484

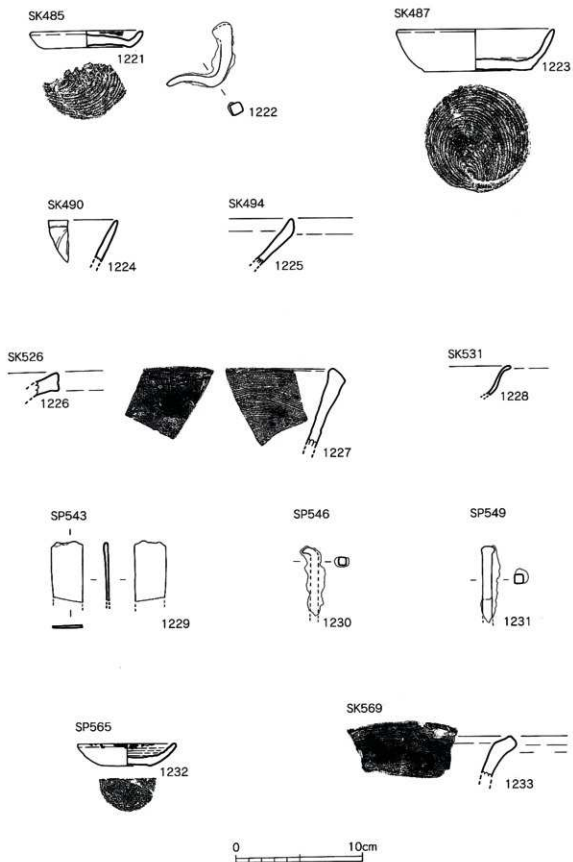
位置と検出面 SP484（第239図）は第Ⅱ面のG61区に位置する柱穴で、その規模は径0.3mを測る。
出土遺物 出土遺物（第254図）のうち、1220は東播系須恵器こね鉢である。

(82) SK485

位置と検出面 SK485（第239図）は第Ⅱ面のG62区で検出された土坑である。土坑は、瓢箪形を呈するが、一部
規模 が調査区外に及ぶ。その規模は、長軸方向が現状で0.9m、幅が0.4～0.55mである。
土師質土器 出土遺物（第255図）のうち、1221は土師質土器小皿である。底部と同じ厚さの体部が、内湾気
味に口縁にいたる。14世紀前半代のものであろう。1222は頭部を折り曲げる鉄製の釘である。
遺構の時期 以上から、本遺構の時期は14世紀前半代に位置づけられる。

(83) SK487

位置と検出面 SK487（第239図）は第Ⅱ面のG62区で検出された土坑であるが、東半分が調査区外に及ぶ。円形基
調を呈するものと思われるが、全形、規模とも不明である。
土師質土器環 出土遺物（第255図）のうち、1223は土師質土器環である。体部はほぼ底部と同じ厚みで、やや
内湾気味に口縁にいたる。体部中程が厚くなり、先端は尖り気味である。14世紀中葉前後のものか。



第255图 大友75次SK485,SK487,SK490,SK494,SK526,SK531,SP543,SP546,SP549,SK565,SK569出土遺物

(84) SK490

位置と検出面 SK490 (第239図) は第2面のG62区で検出された。円形を呈すると思われるが、残りが悪い。
青磁 出土遺物 (第255図) のうち、1224は中国龍泉窯系青磁碗で、鈎蓮弁文がみられる。13世紀代。

(85) SK494

位置と検出面 SK494 (第239図) は第II面のG62区で検出された楕円形の土坑である。長軸0.7m、幅0.5m。
出土遺物 出土遺物 (第255図) のうち、1225は東播系須恵器こね鉢である。

(86) SK526

位置と検出面 SK526 (第239図) は第II面のG62区で検出された。長さ0.8m、幅0.3~0.4mの土坑である。
出土遺物 出土遺物 (第255図) のうち、1226は瓦質土器甕。1227は瓦質土器鉢で、14世紀代のものか。

(87) SK531

位置と検出面 SK531 (第239図) は第II面E62区で検出された。L字形を呈し東西1.1m、南北0.7mを測る。
白磁皿 出土遺物 (第255図) のうち、1228は中国産白磁皿である。16世紀前半代に比定される。

(88) SP543

位置と検出面 SP543 (第240図) はF62区に位置する柱穴で、第III面で検出された。規模は径0.4mである。
砥石 出土遺物 (第255図) のうち、1229は砥石である。両面とも磨り面として使用されている。

(89) SP546

位置と検出面 SP546 (第240図) は第III面のF61区で検出され柱穴で、その規模は径0.3mである。
鉄製釘 出土遺物 (第255図) には、1230の鉄製釘がある。頭部を折り曲げ、断面方形を呈する。

(90) SP549

位置と検出面 SP549 (第240図) は第III面のF61区において検出された柱穴である。
鉄製釘 出土遺物 (第255図) には、1231の鉄製釘がある。頭部を折り曲げ、断面方形を呈する。

(91) SK565

位置と検出面 SK565 (第240図) は第III面のD62・E62区にまたがり検出された不定形土坑である。
土師質土器 出土遺物は (第255図) は1232の内面にロクロ痕を残す土師質土器である。16世紀前葉。

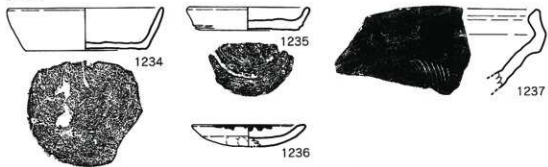
(92) SK569

位置と検出面 SK569 (第240図) は第III面のD61・E61区にまたがり検出された土坑である。東西に長い楕円形
規模 を呈し、その規模は東西1.0m、南北0.6mである。
瓦質土器鍋 出土遺物 (第255図) には、1233の瓦質土器鍋がある。口縁が短く外方に折れる。14世紀代。

(93) SK588

位置と検出面 SK588 (第240図) は第III面のD62区から検出された土坑である。土坑は円形基調を呈し、SK640
規模 を切る。土坑の規模は、径0.6~0.7mである。
出土遺物 出土遺物 (第256図) のうち、1234は土師質土器環である。体部は直立気味に立ち上がる。1235
は土師質土器小皿である。以上2点は14世紀代に比定される。1236は京都系土師器である。京都系

SK588



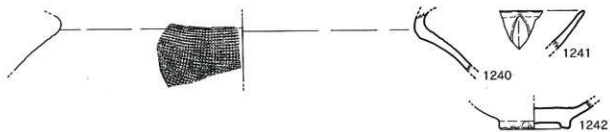
SP589



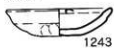
SP590



SK604



SK615



SP657



第256図 大友75次SK588,SP589,SP590,Sk604,SK615,SP657出土遺物

土師器 2 期か。1237は焼締陶器備前焼摺鉢である。乗岡編年の中世 6 期であろう。

遺構の時期 以上から、本遺構の時期は16世紀中葉～後葉に位置づけられる。

(94) SP589

位置と検出面 SP589 (第240図)はD62・E62区にまたがり位置する柱穴で、第Ⅲ面から検出された。柱穴は径
規模 0.3～0.35mである。
出土遺物 出土遺物(第256図)には、1238の瓦質土器鍋がある。鈎状の突帯が口縁部付近に付される。遺
構は14世紀代のものか。

(95) SP590

位置と検出面 SP590 (第240図)は第Ⅲ面のD62区から検出された柱穴である。柱穴は、径0.2～0.4mである。
青磁碗 出土遺物(第256図)には、1239の中国産青磁碗がある。剣先蓮弁文がみられ、15世紀後半以降
のものである。

(96) SK604

位置と検出面 SK604 (第240図)はC60・C61・D60・D61区にまたがり位置する不定形土坑である。第Ⅲ面か
規模 ら検出されたもので、北半は調査区外に及ぶ。その規模は、南北の現存長約3m、幅1.4mである。
須恵器甕 出土遺物(第256図)のうち、1240は須恵器甕である。外面に格子目タタキが施される。1241と
青磁碗 1242は中国産青磁碗である。1241には外面に鎡蓮弁文がみられるもので、13世紀代のもの。
本遺構は14世紀代に位置づけられる。

(97) SK615

位置と検出面 SK615 (第240図)は第Ⅲ面のD61区から検出された土坑である。土坑はSK530を切るもので、円
規模 形基調を呈する。規模は径0.5mである。
京都系土師器 出土遺物(第256図)のうち、1243は京都系土師器である。口径8.3～8.5cmを測るもので、京
都系土師器 2 期に比定される。

(98) SP657

位置と検出面 SP657 (第240図)は第Ⅲ面のE62区から検出された柱穴である。柱穴は径0.25mである。
瓦質土器鍋 出土遺物(第256図)には、1244の瓦質土器鍋である。口縁部は外方にL字状に折れる。14世紀
代のものである。

(99) SP664

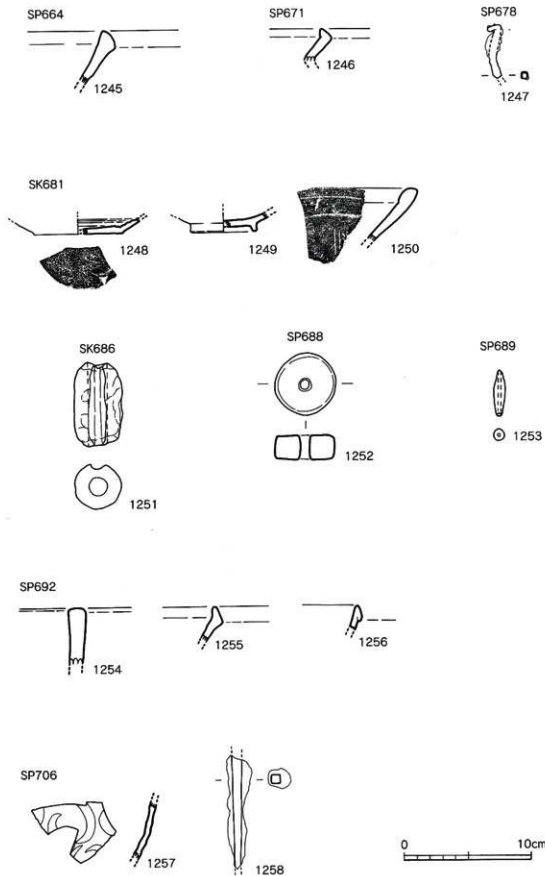
位置と検出面 SP664 (第240図)は第Ⅲ面のD62・E62区にまたがり検出された柱穴で、径0.25mを測る。
東播系須恵器 出土遺物(第257図)のうち、1245は東播系須恵器こね鉢である。

(100) SP671

位置と検出面 SP671 (第240図)は第Ⅲ面のE62区から検出された柱穴である。径は0.3～0.4mである。
防長系鍋 出土遺物(第257図)のうち、1246は防長系瓦質土器鍋である。16世紀代のものであろう。

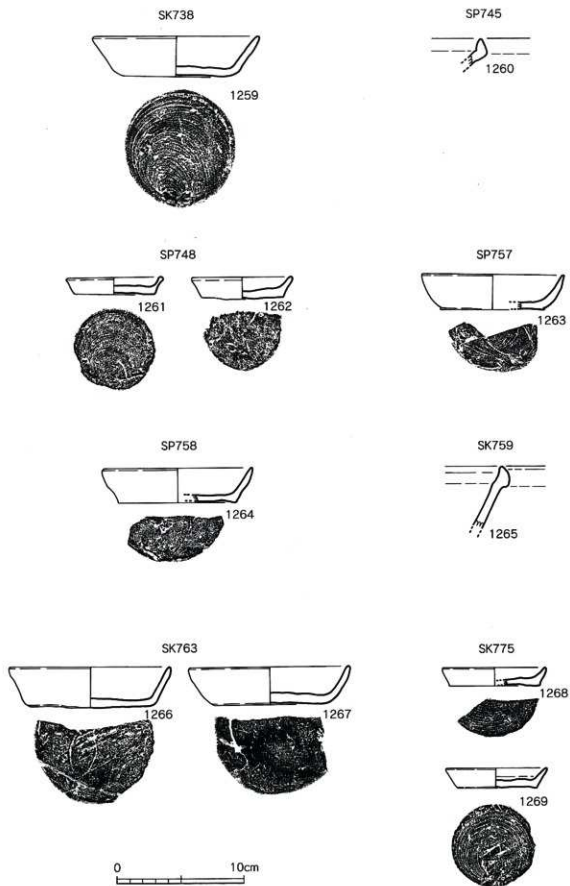
(101) SP678

位置と検出面 SP678 (第257図)は第Ⅲ面のD62区から検出された柱穴で、SP590に切られる。



第257图 大友75次SP664,SP671,SP678,SK681,SK686,SP688,SP689,SP692,SP706出土遺物

- 出土遺物 出土遺物（第257図）には、1247の鉄製釘がある。頭部を折り曲げ、断面方形を呈する。
- (102) SK681
- 位置と検出面 SK681（第240図）は第Ⅲ面のD62区から検出された土坑で、SK614に切られる。土坑は南北方向規模に長軸をもつもので、南北0.4m、東西0.3mである。
- 土師質土器 出土遺物（第257図）のうち、1248は土師質土器である。内面にクロコ痕がみられるもので、16世紀前葉に比定される。1249は吉備系土師器椀である。○世紀代のものか。1250は瓦質土器播鉢である。口縁部内面がわずかに肥厚する。
- (103) SK686
- 位置と検出面 SK686（第239図）は第Ⅲ面のE61区から検出された不定形土坑である。南北に長いもので、その規模は南北0.9m、東西0.25～0.4mである。
- 有溝土鍾 出土遺物（第257図）のうち、1251は有溝土鍾で長軸方向に溝がみられる。
- (104) SP688
- 位置と検出面 SK688（第239図）はE61区に位置する柱穴で、第Ⅲ面から検出された。径は0.25mである。
- 有孔円盤 出土遺物（第257図）のうち、1252は軽石製の有孔円盤である。
- (105) SP689
- 位置と検出面 SK689（第239図）はE61区に位置する柱穴で、第Ⅲ面から検出された。径は0.25mである。
- 出土遺物 出土遺物（第257図）のうち、1253は土鍾である。
- (106) SK692
- 位置と検出面 SP692（第240図）は第Ⅲ面のC61区で検出された大型の不定形土坑である。西側と南側は調査区外に及ぶため、全形は不明である。その規模は現存長で、南北3.7m、東西2.4mを測る。
- 規模 出土遺物（第257図）のうち、1254は瓦質土器鉢。1255は東播系こね鉢。1256は中国産白磁碗。
- 出土遺物
- (107) SP706
- 位置と検出面 SP706（第240図）は第Ⅲ面のD62区で検出された柱穴で、径0.3mを測る。
- 出土遺物 出土遺物（第257図）のうち、1257は青白磁梅瓶の胴部片である。1258は鉄製釘である。
- (108) SK738
- 位置と検出面 SK738（第240図）は第Ⅲ面のD61区で検出された東西方向に長軸をもつ土坑である。SK601に切られているため全形は不明であるが、現存長で東西0.6m、南北0.4mである。
- 規模 出土遺物（第258図）は1259の土師質土器坏で、口径12.8～13.0cmを測る。14世紀前葉か。
- 土師質土器坏
- (109) SK745
- 位置と検出面 SK745（第240図）は第Ⅲ面のD62区検出された土坑であるが、残存状態が悪い
- 防長系鍋 出土遺物（第258図）のうち、1260は防長系の瓦質土器鍋である。
- (110) SP748
- 位置と検出面 SP748（第240図）はD62区に位置する柱穴で、第Ⅲ面で検出された。



第258図 大友75次SK738,SK745,SP748,SP757,SP758,SK759,SK763,SK775出土遺物

土師質土器 出土遺物(第258図)は土師質土器小皿である。1261、1262ともに体部の立ち上がりは急である。
小皿 1261は体部下半が強く摘まれ細くなる。両者の口径は7.4~8.0cmで、14世紀後葉以降か。

(111) SP757

位置と検出面 SP757(第240図)はE61区に位置する柱穴である。第Ⅲ面から検出されたもので、径0.3mを測る。
土師質土器環 出土遺物(第258図)の1263は土師質土器環である。体部が内湾気味に口縁部にいたる。14世紀代の所産であろう。

(112) SP758

位置と検出面 SP758(第240図)は第Ⅲ面のE61区で検出された柱穴で、径0.3mを測る。
土師質土器環 出土遺物(第258図)は1264の土師質土器環である。底部と同じ厚みに体部が立ち上がるが、体部下半が抉れた感じである。14世紀前葉のものか。

(113) SK759

位置と検出面 SK759(第240図)は第Ⅲ面のE61区で検出された土坑である。土坑は円形を呈し、その規模は0.6
規模 ~0.7mを測る。
東播系 出土遺物(第258図)は1265の東播系の須恵器こね鉢である。

(114) SK763

位置と検出面 SK763(第240図)は第Ⅲ面のE62区で検出された土坑である。円形あるいは楕円形を呈すると思
われるが、遺構の残存状況が悪く全形は不明である。また、大型の土坑とも切り合い関係にあると
思われるが前後関係等は不明である。
土師質土器環 SK763(第258図)は、底部糸切りの土師質土器環である。1266は底部と同じ厚さの体部が直線
的にのびるものである。1267も体部の厚さが底部と同じであるが、体部が内湾気味である。両者は
口径がともに12.8cmで、14世紀中葉前後に位置付けられよう。

(115) SK775

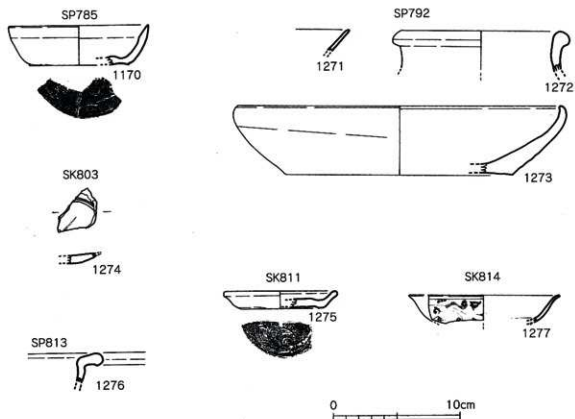
位置と検出面 SK775(第240図)は第Ⅲ面で検出された土坑で、C61区に位置する。土坑は南北に長いものと思
われるが、他遺構から切られ全形は不明である。規模は、現存長で南北0.3mである。
規模
土師質土器 出土遺物(第258図)は土師質土器小皿である。1268は復元口径8.0cmで、体部は底部と同じ厚
みの体部が直立気味に立ち上がる。1269も同様な器形を呈するもので、口径7.9~8.1cmを測る。
14世紀中は前後のものか。

(116) SP785

位置と検出面 SP785(第240図)はD61区で検出された柱穴である。第Ⅲ面から検出されたもので、径0.2mを
測る。
土師質土器環 出土遺物(第259図)のうち、1270は土師質土器環である。底部は糸切りで、復元口径11.0cmを
測る。体部は内湾気味で、口縁端部は強く摘まれ尖り気味である。

(117) SP792

位置と検出面 SP792(第240図)は第Ⅲ面で検出された柱穴で、D62区に位置する。柱穴の径は0.25mである
出土遺物 出土遺物(第259図)のうち、1271は中国産白磁皿であろう。1272は焼締陶器壺である。口径は



第259図 大友75次SP785,SP792,SK803,SK811,SP813,SP814出土遺物

玉縁状を呈する。1273は焼締陶器備前焼鉢である。口径に比し、器高が5.4cmと低いものである。口縁部は内湾し、やや尖り気味である。

(118) SK803

位置と検出面 SK803(第240図)は、第Ⅲ面で検出されたSB628内にある土坑である。
出土遺物 出土遺物(第259図)は、1274の中国阿安窯系青磁皿である。12世紀後半に比定される。

(119) SK811

位置と検出面 SK811(第240図)は第Ⅲ面のD61区で検出された柱穴で、径0.2mを測る。
出土遺物 出土遺物(第259図)は、1275の土師質土器小皿である。復元口径8.8cmを測り、底部と同じ厚みの体部が斜方向に立ち上がる。14世紀前半代のものであろう。

(120) SP813

位置と検出面 SP813(第240図)は第Ⅲ面E62区で検出された不定形土坑で、SD804を切る。全体に浅いもので、他の多くの土坑や柱穴と重複している。そのため、本来の平面形は必ずしも明確ではないが、その規模は3.0×2.5mである。
出土遺物 出土遺物(第259図)は、1276の瓦質土器鍋である。口縁部はL字状に折れ、端部がやや垂れ下がりが気味である。